
有栖キャロの小学校物語

blueocean

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有栖キャラコの小学校物語

【Nコード】

N6362Y

【作者名】

blueocean

【あらすじ】

有栖零治に救われ家族に迎えられたキャラコ・ル・ルシエ。家族に迎えられ、時期は秋に入る。そしてキャラコは『有栖キャラコ』として聖祥大学付属小学校へ入学する。

友達のルーテシア・アルピーノと一緒に転校したクラスはみんなからエローシユと呼ばれる男の子が中心となったちよつと変わったクラスだった。

これは魔法少女リリカルなのは 平凡な日常を望む転生者の番外編
です。
始めて見る人は本編キャラ紹介を読んでください。

本編キャラ紹介（本編を読んでいる人は読まなくていいです）（前書き）

これは本作に出てくる本編のキャラ紹介です。

ここに書かれているキャラがよく出る予定です。

ここに書かれていないキャラも出るとは思いますが、回数は少ないです。

多いようなら付け足します。

本編キャラ紹介（本編を読んでいる人は読まなくていいです）

有栖キャラコ

本作の主人公。

自身の住んでいる里を追放され、力尽きる寸前で、零治達と出会う。その後、零治の想いで零治の家族となり、有栖キャラコとしてこっちに来て来た。

性格は真面目で純粋。

知らないことが多いので、知識欲がある。

お兄ちゃんが大好き。

便宜上はシャイデ・ミナートが保護責任者。

ちなみにフリードはスカさんが開発したモンスターボールモドキの中にいて、そこから念話することで話すことが出来る。
ライの影響で阪神タオガースのファン

ルーテシア・アルピーノ

本作のサブ主人公。

元タスカリエッティのアジトにいたが、母親のメガーヌが目覚めたことにより、地球にやって来た。

メガーヌはまだ目覚めたばかりで、補助としてゼストも地球にいる。

まだ母親に会えたばかりで、喋り方が固い。
マイペースで、のほほんとしている。

キャラと同様に知らない事ばかりな環境が影響か知識欲がある。

ルーテシア的にはメガーヌとゼストをくっつけようとしている。

ライの影響で阪神タオガースのファン

有栖零治

本編の主人公。

転生者。

最初は普通の転生者同様に原作介入を考えていたが、もうひとりの転生者が先に介入してしまった為、タイミングを逃し、そのままズルズルと日々が過ぎてしまった。闇の書事件の後、マテリアルの3人を助け、その3人を家族に迎えたことにより、原作とは関わらない平凡な生活を望むようになった。

そして中学2年になってなのは達原作キャラと同じクラスになってから今までの生活が一気に変わる。

面倒だと思いながらも、ほっとけないと手を貸すお節介。
キャラの事が大好きで重度のシスコン。

ロリコンと言つとかなり怒る。

有栖星

星光の殲滅者。

なのはたちに負け、消えかかっている所で零治と出会い、助けられ、それ以来ずっと一緒に過ごしている。

前まではなのはたちと遭遇しないためにも違う学校に通っていたが、事件に巻き込まれ、存在がバレてしまい、再び出会うことに。しかし、戦闘になるような事はなく、話し合いで済んだため、キャラ口と同時期に零治と同じ中学へ転校してきた。

真面目で、清純、大和撫子のような振る舞いから、前の中学では人気があった。始めは感情を表に出すことが少なかったが、最近はよく表に出すようになった。

オバケが嫌いで、怪談や、お化け屋敷など苦手。運動神経は悪くはないのだが、ボールを使う競技はからつきし駄目。

家では母親みたいな立ち位置で炊事、洗濯、掃除と全部星がこなす。太りやすい体質が悩み。

有栖ライ

雷刃の襲撃者。

星と同様に消えかかっていた所を零治に助けられ、それ以来ずっと一緒。

性格は明るく、ポジティブで元気が絶えない。初めて会う人物でも直ぐに仲良くなれる。遊ぶことが大好きで、前の学校ではよく休み時間に男子とサッカーなどしていた。

運動神経はマテリアルの中で一番良く、近所のバツティングセンターでホームランキングになったり、ピッチングアウトでパーフェクトをとったりしている。

ただしアホの子で勉強もからっきし駄目。スタイルが中学生ばなれしていて、いくら食べても太らないという女性の全てを敵に回すような体質を持っている。

ちなみに阪神タオガースファン。

有栖夜美

闇統べる王。

星、ライと同じで零治に助けられて以来ずっと一緒に。一人称は我と偉そうにしているが、原作みたいに人を罵ったりしない。

最初こそ、偉そうな態度が目立ったが、色々濃いキャラが現れ、今ではすっかり常識人。

ここぞと言うときに零治は夜美を頼ることが多い。人見知りが激しく、中々初対面の人と話すのが苦手。しかし、運動も出来、勉強も優秀と、3人の中で一番安定している。ただし、はやてとは違い料理が全く出来ない。

最近は乙女本にハマっている。
悩みは身長も含め、余り成長しないこと。

フェリア・イーグレイ

有栖家の居候。

本名はナンバー5チンク。

スカリエッティの命令で海鳴市に居ると思われる黒の亡霊（零治の事）を調査するためにこつちに学生として潜り込んだ。

現在は、その正体もすっかり分かり、ただ単に学生として過ごしている。

最初こそ世間知らずで箸も使えない状況だったが、今ではすっかり地球の生活に馴染んでいる。

性格は真面目で、しっかり者。

ただ、可愛いのが大好きで、可愛いものを見るといつもとは違くなる。

悩みは姉に見えないことと、中々成長しない体。

ジェイル・スカリエッティ

無限の欲望、次元犯罪者。

黒の亡霊に依頼したことから始まり、チンクの報告書を読んだり、地球の文化に興味を持つにつれてナンバーズとふれあい、父親とし

ての感情が生まれ、完全に善人化した。

脳みその興味が違う科学者に行ったこともあり、娘たちの事を第一に思っていて、ガジェットの製作など全て停止している。

現在はまだ目覚めていない残りの娘たちの調整と自分の犯してきた罪の精算をしている。

最近の悩みは躰の仕方。ウーノと一緒に悩み中。

本編キャラ紹介(本編を読んでいる人は読まなくていいです)(後書き)

こんな感じだなと思ってくれれば良いです。

第1話 今日から小学生になります(前書き)

こんにちはblueoceanです。

本編でキャラを出してからずっとやりたいと思ってました。

やれて後悔はない!!

それでは本編をどうぞ

第1話 今日から小学生になります

「キヤロ、忘れ物ないですか？」

「大丈夫です、星お姉ちゃん。」

私は靴を履き終え、側に置いたバッグを背負いました。

「それじゃあ、レイ、フェリア、キヤロを頼みますね。」

「ああ、誰一人キヤロには触らせない。」

「フェリア、レイはダメそうなのでお願いします。」

「了解した……」

お兄ちゃん……

流石に恥ずかしいよ……

「わー！！もうこんな時間！？星、なんで起こしてくれなかったのさー！！」

ライお姉ちゃんが大声を上げながら星お姉ちゃんに文句を言っています。

「ちゃんと起こしました！！それでも起きなかったライが悪いんですー！！」

「そんなことより早く着替える。このままだと我らも遅刻するぞ！」

「わ、分かってるよ」

ライお姉ちゃんが慌てて部屋の中を行ったり来たりしています。

「じゃあ、俺達は先に行くな。」

「はい、気を付けて・・・」

「キャラ、車には気をつけるんだぞ。」

「はい、行ってきます！」

そう言って、私は元気よく玄関の外へ出ました。

ピンポン。

マンションの一階降りて、インターホンを鳴らしました。

「おはようございますー！」

「あら、おはようキャラちゃん。ルー、キャラちゃん来たわよ！」

ドアを開けてくれたのはゼストさん、挨拶してくれたのはルーち

ちゃんのお母さん、メガー又さんです。

「おはよう、キャラ。」

「おはよう、ルーちゃん。」

「おはよう、フェリア、レイ。」

「ああ、おはよう。」

「おはよう。」

普通に朝の挨拶をしている様に見えますが、ルーちゃんの頭はボサボサです・・・

恐らく寝坊したのだと思います。

「ごめんなさいね、もう少しで準備終わるから・・・」

そう言つてメガー又さんはルーちゃんに声を掛けて、部屋の中へ入つて行きました。

今日から学校なのに落ち着いてるな、ルーちゃん。

私なんて緊張して中々眠れなかったのに・・・

「キャラちゃん。」

「は、はい・・・」

「ルーテシアを頼む。のんびりしているから苦労すると思うが・・・」

「俺もいますし大丈夫ですよ。」

「零治、ルーテシアに手を出したら、地獄を見ろと思え・・・」

「だ、大丈夫ですから、デバイスしまつて・・・」

ゼストさんもすっかりお父さんですね。

「お待たせ」

「やっと来たか。ルー、ちゃんと行ってきますを言っただぞ。」

「行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

「気を付けてな。」

「行ってきます。」

こうして私達は学校に向かいました・・・

「キャラ、動きが固くなってるぞ」

「は、はい・・・」

うっっ、やっぱり緊張しちゃうな……

「ルー、そっちじゃない!!」

「……あれ?」

フェリアお姉ちゃんが慌ててルーちゃんに声をかけてました。
ルーちゃんは何故か左の小道に進んでいて、フェリアお姉ちゃんが
気がつかなかったら迷子になっていたと思います。

ルーちゃん、目を離したらすぐ何処かへ行っちゃうからな……

「ルー、私と手をつなごう。それなら問題ないだろう。」

「はい。」

「……それでは後はお願いします。」

「はい、分かりました。あなた達も中等部に遅れないようにね。」

「はい。じゃあキャロ、ルー、頑張れよ。」

「は、はい……」

「ハッイ。」

「それじゃあ行くか。」

「ああ。」

そう言ってお兄ちゃんは行ってしまいました……

ちよつと不安だな……

「さて、先ずは私の自己紹介ね。私はあなたたちのクラス、1-1の担任の細野霧子よ、よろしくね。」

「は、はい！よろしくお願ひします!!」

「お願ひします。」

細野霧子先生。

すごく綺麗で若い先生だけど優しそうだな。

「先ずは軽く校内の説明ね。一年生の教室は……」

そこから先生の校内の説明が始まりました。

「まあ緊張しないで、クラスのみんなは……変わってるけど、友達思いのいい子達ばかりよ。」

「は、はあ……」

随分間があつたけど、変わってるってなんだろう？

「ルーちゃんは大丈夫？」

「ルーは大丈夫。キャラはルーが守る。」

「中には敵なんていませんから大丈夫よ。取り敢えず私が呼んだら入ってきてね。」

そう言つて、先生は教室に入つて行きました。

「キャラ。」

「何？」

「友達一杯作ろうね。」

「そうだね!!」

『今日は新しく皆さんの友達になる子がいます。』

『うおおおお!!ようやく俺にも嫁が!!』

『……既に女の子と思つてるあなたの将来を心配するわ。』

『先生の言葉じゃない!!』

『ひるたいわよヒローシユ。』

『俺は江口伸也！！エローシユちゃんわ！！』

『はいはい、エローシユ君、静かにね。』

『エローシユちゃん！』

……既に盛り上がってますね。

『先生、どんな子ですか？』

『二人共可愛い女の子よ。』

『………片方はピンクの髪の毛の女の子、もう片方は紫の長い髪の毛の子。』

『………小岩井君、正解だけど、どうして知ってるの？』

『………僕に不可能の2文字は無い。』

『3文字ね、全く、また職員室で盗撮したでしょう……』

『そんな事実はない？』

『なぜ疑問形なの？』

『先生、岩つちは悪くない、俺達男子は先生の際どいアングルを撮りたかっただけなんだ！！』

『かばってるようだけど、他の男子にも飛び火してるわよ。』

『そつだぞ、黙れエローシユ!!』

『しゃべりすぎだぞ、アホエローシユ!!』

『変態!!エロガキ!!だからエローシユって呼ばれてるのよ!!』

『ふっざけるな!!勝手に変なあだ名つけたのかと思えば、今度はエロいからだど・・・あれ?ベストマッチじゃね?』

『・・・もはや変更しようがない。』

『あきらめるな親友、何かあるはずだ!何か・・・』

いつになったら中に入れるのでしょうか・・・

『もういいから一旦静かに!!これ以上転校生を待たせちゃいけないじゃない。それじゃあ2人とも入って。』

と、とうとうこの時が・・・

ま、また緊張してきた・・・

「行こう、キャロ。」

「は、はい!」

私達は教室に入りました。

「は、はじめしゅて、あ、有栖キャ、キャロでしゅ！」

パチパチパチ！！

皆さんが暖かい拍手を……

って何かが違う気がする！

「キャロちゃん可愛い〜俺と結婚してくれ〜！」

「黙れ変態エローシユ！！！」

「やかましいから夏穂は黙ってる！」

け、結婚って……

私はお兄ちゃんに……

「ルーテシア・アルピーノです。もしかしたらグランガイツになるかもです。」

ええっー！？聞いてないよー！？

「確かに仲がよかったけれど、それほどだったの！？」

「結婚式るときは是非来て。」

「うん！今日の内にお兄ちゃんに言うておくね！」

よかった、今日はすぐ帰ったらみんなに報告しなきゃ！

「あのね、二人とも……」

「はい？」

「歓迎しようとしてたあの子どもがかわいそうだから、後にしてもらっていい？」

「あつ。」

みんなを見てみると気まずそうに手を下ろす人がしばしば。

恐らく拍手してくれるつもりだったんだと思う。

何かごめんなさい……

「さあ、質問タイムよ。好きな質問をどうぞ。」

「はい！」

「はい、花井さん。」

「好きな食べ物は何ですか？」

好きな食べ物ですか？

えつと……

「私はシチューです。」

「ルーはハンバーグ。」

「俺はまさかのカツオのカルパッチョ!!」

「いや、聞いてないから……」

「ていうかエローシュ君？それって居酒屋のメニューじゃないのかな？」

「いやいやいや、こんな子供がウヅカやテキーラやほろ〇いを飲めるわけないじゃないですか」

「……詳しい。」

「むしろ飲んででしょ？」

「そ、そんなことねえよ夏穂。ほろ〇いなんかはジュースと変わらないかと思ってないから!!」

「……エローシュは黙ったほうがいい。」

「エローシュじゃないし!」

「アンタね……どうせおじさまのせいでしょうけど、この年でアル中何て話にならないわよ……」

「大丈夫、基本ほろ〇い一本しか飲まないから。」

「飲んでる事に問題があるのよ。」

女の子に怒られて静かになると思いきや、今度は3人で口論し始めました。

私達蚊帳の外……

隣のルーちゃんも流石に気まずそう……

「ほら、その仲良し3人、転校生が蚊帳の外だから、少し静かにしてなさい。」

「……はい……」

さつきからあの3人ばかりが喋ってるような気がするなあ……

「ごめんなさいね、あの3人は幼稚園の前からずっと一緒みたいで仲がいいのよ……」

「そうだぜ！俺は江口伸也！」

「またの名をエローシュ……」

「そうエロ……って違う!!」

「あんたらね……私は千歳夏穂よ、よろしく。」

「……小岩井佐助。」

「はい、よろしくお願ひします……!」

「よろしくお願ひします。」

少し変わってるけど、仲良く出来ると思う。

「まあ困った時は俺に相談してくれ。一応俺がこのクラスのリーダーだからさ。」

「……江口君がリーダー？」

ルーテシアちゃんもそう思ったみたいで微妙な顔をしています。

声に出さなかった私達は偉いと思いますけど。

「……そうだよ、どうせ俺なんかリーダーできるわけ無いって思ったんだよな。分かるよ、どうせ俺なんてみんなからエローシュって呼ばれる変態だし、女の子にもモテないしな……」

あれ？凄く自分を攻め出しましたが、どうしたんでしょう？

「……エローシュはナイーブ。」

「勝手に復活するから気にしないでいいわよ。」

「そうですか……？」

少し不安でしたが、千歳さんに言われた通りに気にしない事にしました。

「あまり対した質問でできなかったけど、後は自分達でね。二人は窓側の空いてる席を使って。今日は歓迎会という意味も込めて、この後学校案内とレクをするからみんなそのつもりでね。」

そう聞いたクラスみんなは一斉に盛り上がった。
さっきまでブルーだった江口君も混ぜてる。

レクってレクリエーションの事かな？

そんな事より、私は始めこそ緊張していたけど、いつのまにか普段の私でいることに気がつきました。

このクラスの雰囲気緊張も吹っ飛んでいたみたいです。

お兄ちゃん、学校って楽しい所ですね。

第1話 今日から小学生になります（後書き）

基本、あの3人とキャラ、ルーテシアと後で出るもう一人の女の子をメインで進みます。

更新スピードは本編と同じスピードでやりたいんですけど、本編中心で更新しようと思います。

次は学校案内、レクです。

・ 恐らく本編と同じ様に誤字、脱字が多いと思うので、ご了承ください・・・

これからよろしく願います。

第2話 どろけいは警察と泥棒の戦争です（前書き）

こんにちはblueoceanです。

本編と同じスピードと思ってましたが、3時間位で書き終わってしまいました。

やはり最初は速く書き終わるな……

それではどうぞ……

第2話 どろけいは警察と泥棒の戦争です

「ここが、多目的ホール。映画を見たり、お昼寝したり、室内野球したり、室内テニスも出来る。みんなの遊び……」

バン！！

「アホな事教えんでいい！！」

千歳ちゃんに頭を叩かれていました……
エローシユ君、結構痛そう……

「ここで特別授業をしたり、学年で集まる時にここを使用したりします。」

なるほど……

「ここは図書室。実はここが一番奥の本棚の一番下の端に歴代の卒業生が残していった伝統のエロ本が……」

「千歳ちゃん、確保。」

「了解！」

「……………あああああああ……！！……………」

男子の殆どが血の涙を流してる。

そう言えば、お兄ちゃんも星お姉ちゃんからエロ本没収されてものすごく泣いていたけど……

「ゼストもエロ本取られて泣いていた……」

「エロ本ってどんな内容なんだろうね？」

エッチな内容だっていうのは分かるけどな……
私とルーちゃんは首をかしげてその光景を見ました。

「ここはプール！！そして今年の夏、先生のスク水は素晴らしかった！！相棒！！焼き増しはすんでるか？」

「……問題ない。」

「じゃあ一枚500円。」何だと！？ちくしょう！！今週はモンポケのカードを買うために貯めていたのに……お金は……」

「小岩井君、その写真没収です。」

「なん……だと!?!？」

当たり前だと思いません。

「ここが我が小学校で有名な聖堂！でもぶっちゃけ要らないと思う。」

「エローシュ、それはないんじゃない？」

「エローシュ言うな！！」

「ここで全校集会をやったり、公演を開いたりします。」

「大きいですね〜」

「広い〜」

「二人共聞いて!？」

「JJJ……」

「ここは屋上。一応開けているけど、間違っても柵を登ったりしないでね。基本的にはお弁当を食べたりするのにここを使ってるわ。」

「なるほど〜」

「……」

「……エローシュ、元気出せ。」

「エローシュ……じゃねえよ……グスン。」

「さて、学校案内はこれくらいにして、みんなでレクをしましょう！」

「……………いえい!!」「……………」

おお、みんな盛り上がってます。

「それじゃあ何がしたい?」

「どろけい!!」

「ドッジボール!!」

「野球拳!!」

「確保!!」

「ちよっ!?待てっって冗談だっって!!痛!?誰だ今髪引っ張った奴!!」

先生の一声でエローシュ君が女の子みんなにどつかれています。

「2人は何がしたい?」

「えっと……どうする？」

「どろけいってなんだろう……」

そう言えばそれはお兄ちゃん達から聞いたことが無いなあ……

ドッジボールの事は星お姉ちゃんから詳しく聞いてるけど……

「それじゃあどろけいで。」

「分かった、どろけいね。みんな〜！どろけいしますよ〜」

凄く楽しみです。

「ルールを説明しよう！！ルールは簡単！！警察が泥棒を捕まえる。それだけだ！！」

「違うでしょ……捕まっても、檻にいる泥棒をタッチすればまた逃げられるの。制限時間までに全員捕まえれば警察の勝ち。逃げ切れば泥棒の勝ち。あつ、ちなみに校内に入っちゃ駄目だからね。」

なるほど……

「それじゃあ警察と泥棒に別れましょうか。」

先生の一声で私達はそれぞれ別れました。

警察

千歳、ルーテシア、e t c (クラスの3分の1)

泥棒

エローシユ、小岩井、キャロ、e t c (クラスの3分の2)

「諸君、作戦を説明する!!」

校舎裏にある物置小屋裏で、泥棒のみんなが集まっています。ちよつと狭いけど、我慢しよう。

「各自逃げるのは複数で逃げる。捕まっても救出に一人で行くことを禁止する!片方が捕まった場合は誰か別の組と行動するように!」

そう言われて、男の子一人が手を上げる。

「エロ隊長、どういうことでしょうか?」

「エロ隊長はやめてくれ!内容は簡単だ、単独で助けようとしても

返り討ちにあっただけだからだ！」

次に別の男の子が手を上げた。

「ですが、少数になった場合はどうしますか？」

「その時はこの忍者の末裔佐助がみんなをパパッと助ける。だから無理して救助に当たらなくていい。」

「任せろ……。」

サムズアップして宣言する小岩井君。
凄く自信があるみたいです。

「よし、それじゃあ、最後まで生き残って勝利の美酒を飲もうじゃないか!!！」

エローシュ君がそう宣言して泥棒のみんなは散らばりました。

「なるべく見つからないように……。」

私はハッキリ言って運動が苦手です。
と言っても家の皆さんが運動神経が良いだけなのかもしれませんけど……。

あつ、ちなみにルーちゃんは運動神経良いです。

アジトで走り回って速くなったって言っていましたけど……

羨ましいです……

そんなわけで私はブランコ裏の茂みに身を潜めています。

隠れるのは得意です!!

「有栖ちゃん、ここにいたのか。」

「あつ、エローシュ君。」

「エローシュちゃんわ!……でみんなどうだ?」

「うまく逃げているみたいだよ。」

2人で基本動いているので、追いかけても分断するってやり方でうまく逃げています。

足の速さもそこまで違いがないみたいで、警察が迷ってるうちに逃げ切っています。

「よし、これで捕まっても、相棒の影シャドーの薄いスキルがあれば捕まった奴らも逃がせる筈……」

「小岩井君逮捕!!」

「はあああああ!?!」

エローシュ君、立ち上がって凄い大声でビックリしていました。それほど予想外だったのでしょ……

・・・おかげで隠れてるのがバレました。

「・・・済まない、油断した。」

「一体何があつたんだ!？」

「佐助は校庭に落ちているエロ本に食いついたわ。単純ね。」

そう言つて千歳さんが勝ち誇つた顔をしています。

「くっ、だが逮捕される価値はあつた。」

「夏穂!!俺の分は?」

「必要ないでしょ、エロシユは運動神経並みだから。」

「ガツデム!!」

頭を抑えて大きなアクションを取りました。

「くそっ、なぜ俺にはオリ主特典がないんだ!!あの見習い神が憎い!!」

何を言ってるのかさっぱりですが、取り敢えず、神様に八つ当たりしてることだけは分かりました。

「みんな、あそこにエロシユがいるから!エロシユさえ捕まえれば、勝つたも同然よ!」

「ooooooooooooooおおっ！！」

追いかけていた警察が一気にこっちに來ます！

「有栖ちゃん、逃げるぞー！」

「はいー！」

私はエローシュ君とその場から離れました。

「エローシュ君、こっちは？」

「だ、駄目だ！視界の悪い所はいきなり現れて逮捕って事もありえる！」

そう言ってるエローシュ君ですが、ハッキリ言って私より足が遅いです。

ですが、まだ逃げ切ってる所を見るとクラスのみんなより足が遅いって訳でもないみたいです。

「って言うか……有栖ちゃん……速い……」

「エローシュ君、息切れ早いー！」

スピードも落ちてきました。

このままじゃまずいです……

「……………有栖ちゃん。」

エローシユ君はいきなり逃げるのを止めました。

「どうしたのですか？逃げないと捕まってしまうですよ……！」

「……………俺を置いて早く逃げろ、ここは俺が抑える。」

「なっ、何を言って……………」

「いいから……このままじゃどのみち二人共捕まってしまう……！有栖ちゃん、お前は俺より足が速いんだ。俺が抑えている内に早く逃げろ……！」

「でも……………」

「有栖ちゃん……！俺の屍を超えて行け……！」

「……！エローシユ君……………ごめん……！」

私はエローシユ君を置いて一人で逃げました。

「ごめんなさい、あなたの犠牲は無駄にしないから……！」

「ああ、泥棒の仲間を頼む………さてお前ら。」

エローシユは警察の前に仁王立ちになって立ち塞がった。その体からは威圧感が漂っている。

「ここから先は行かせねえ!!!」

エローシユの咆哮は警察を怖気付かせた。

「この先には俺の好きな女がいるんだ!!!死んでも通すか!!!」

エローシユの覚悟は強烈で他を圧倒している。

「どうした、怖気付いたか？俺は全員でかかってきてもいいんだぜ？ただし……」

「覚悟のある奴だけ「タッチ」……」

エローシユの肩にはルーテシアの手が乗っていた。

「エローシユ、確保。みんな、キャロは結構足が速いから複数で追いかけて。」

「「「「「了解!」「」「」「」

ルーテシアの指示の元、他の警察が動き出した。

「あ……アルピーノさん？」

「どうしたの？泥棒は余計な事は喋らない。」

「空気読んでくれないんですか？」

「長くなりそうだし、ありきたり。」

「ダメだしされた!？」

「はあはあ……」

キャロです。

残りの泥棒もあと僅かになりました……

それを見て警察は檻の守りを少なくして、泥棒を捕まえに行っています。

ハッキリ言っつてピンチです。

ですが……

「これはピンチでありチャンスです……」

里から追い出されてから培ってきた隠れる能力。これを活かす時が来ました。

「確かこうして……」

ライお姉ちゃんが言っつてました。

『有名な傭兵はダンボールに身を潜めるんだって。』

確かにライお姉ちゃんがやっていたゲームのおじさんはダンボールに身を潜めて敵のアジトに侵入してました。

そして運がいいことに、ダンボールも始めにいた小屋の脇にありました。

「よし、準備完了です!」

檻は花壇に囲まれた旗の棒が立っているコンクリートのスペース。

目標に向かって、私は行動に移りました。

「なあ相棒、エロ本は?」

「没収された……」

「あ、いや、ドンマイ。」

「エローシユニソ……」

「くっ……」

エローシュ君、エロ本見たさに捕まった訳ではないですよね？
ピタッ。

「あれ？こんな所にダンボールあったっけ？」

「用務員のおじさんが置いていったんじゃないの？」

そう言っつて男の子2人組は行きました。

どうやらやり過ごせたようです……

ゆっくりと、音を出さないように……

「あと、誰が捕まってる？」

「有栖ちゃんがまだ……！」

「恐らく隠れてると思うから念入りに探して！」

「分かった……！」

恐らく千歳さんが指示を送ったんだと思う。

けれど、これで警察の人数も更に減りました。

チャンスだ。

「ルーちゃん、有栖ちゃんがどこにいるか分からない？」

「うっん、キャロって私よりは足は速くないんだけど・・・」

まだあの二人にはバレていない。

距離ももう少し。このまま進めば・・・

「ん？ダンボール？」

「結構汚い・・・」

「えっ！？どれ？」

何でエローシユ君と小岩井君が反応するの!？

これじゃあバレちゃう!!

「・・・怪しい。」

ルーちゃんがそう言って近づいてくる。

こうなったないちかばちか・・・

「・・・それ!」

サッと立ち上がって、かぶってたダンボールをルーちゃんに投げました。

「くっ・・・」

ルーちゃんも動きが少し止まりました。

私ですか？

疲れていた上に、ルーちゃんに追いかけられたら勝てません……

キンコンカーンコン……

「はい、チャイムがなったのでここまで。教室に帰って、帰りの会するわよ。」

「……………はい！」「……………」

みんなが反応して下駄箱に向かいます。

「あゝ、ちくしょう。有栖ちゃんのおかげで逃げられたのに……」

「夏穂のバカ体力には驚く。」

「うるさいわね、別にいいじゃない……」

確かに千歳ちゃんはルーちゃんに負けなくらいの速さでみんなを捕まえていました。

「それにしても2人は運動得意なのね。」

「そうだな、それに有栖ちゃんのダンボールにはマジでビックリしたぜ！」

「僕も驚いた……」

「私も……」

「えへへ、お姉ちゃんのゲームを見て、思い出したんだ。それと私の事はキャラでいいよ。」

「そうか、なら俺は「エローシュ」。「そうエローシュで……って佐助!!」

「もう諦める。」

「そうね、佐助の言うとおりがも。」

「そんな現実みとめねえ!!そんな幻想俺がぶち壊してやる!!」

「うん無理。」

「無理。」

「無理だね。」

「無理ですね。」

「くそ……みんな大嫌いだあ!!」

泣きながらどこかへ走って行ってしまいました。

「いいんですかね?」

「いいのよいつものことだから。」

「そっだ、気にするだけ仕方ない。それと僕は佐助でいい。」

「なら私も夏穂でいいわよ。」

「ならルーもルーでいい。」

「はい!!…皆さん、これからよろしくお願いします!!…」

お兄ちゃん、早速、お友達ができましたよ!!…

第2話 どろけいは警察と泥棒の戦争です（後書き）

とこんな感じで3人と友達になりました。

次はメインとなるもう一人の女の子の話にしたいと思います。

それが終わったらオリキャラ紹介したいと思います。

次は本編の方を中心に書こうと思いますが、こっちがまた早く書き終わったら投稿しようと思います。

次もよろしくお願いします！

第3話 1年1組はとっても良いクラスです(前書き)

こんにちはblueoceanです。

今回最後のメインキャラが出ますが、話のメインはエローシユです。

それではどうぞ……

第3話 1年1組はとっても良いクラスです

さて、私が小学校に入って3日経ちました。

クラスのみんなども仲良くなれて、毎日がとても楽しいです!!

「さあ皆さん、今日は昨日あった事を作文で書いてみてください。枚数は自由でいいですけど、最低1枚は書いてくださいね。」

国語の授業、私はハッキリ言って苦手です。

算数と英語は得意なんですけど・・・

「ルーちゃん。」

「何？」

「作文・・・得意？」

「苦手。」

やっぱり・・・

私達はひらがなを覚えたばかりですし、漢字もまだ完璧には覚えていません。

「取り敢えずやれるだけやろう。」

「そうですね。」

私は作文に集中しました。

20分後……………

「出来たああああ!!」

いきなり的大声にクラスのみんながビックリしました。

どうやら声の主はエローシュ君みたいです。

「先生、どお?」

「まだ読んでないわよ……」

呆れながら先生は作文に目を通し始めました。

「……………まあいいでしょう。しかしよく難しい漢字知ってるわねエローシュ君。」

「エローシュちゃいます!俺ってこんなだけ勉強好きで幼稚園の頃から天才で名が通ってたから。」

うわっ、先生凄く驚いた顔をしています。

「何でそんな顔!??」

「だって、自分から天才って言うなんてね……………」

「そつち！？それと痛い子を見るような目で見ないで！！時々先生は俺の事をいじめてるのかと思っちゃうよ！！！」

「・・・・・・・・」

「反論しないの！？」

まあ先生があんな態度を取るのはエローシユ君だけだろうな・・・

「いいから、後は寝るなりボーツとするなり好きになさい。だけどこの教室から出るのだけは駄目よ。」

「うーっす。」

そう言ってエローシユ君は自分の席に戻って寝始めました。

「エローシユ君凄いな。」

「私負けない、キャロは私の物。」

ちよつと怖いんだけどルーちゃん・・・・・・・・

「昼飯タイム！！！」

今いるのは中庭。

ここで5人で円を描いてお弁当を食べています。

「ちょうどいい気候ね。気持ち良いわ。」

「そうですね、昨日は曇ってたので今日は特にそう思います。」

そう言いながら私はお弁当を取り出しました。

「今日も星姉？」

「うん、そうだよ。本当はお兄ちゃんを作るって言っただけで、『お弁当は私が作ります！！レイは邪魔しないでください』ってお兄ちゃん追い出されてた。」

「やっぱり星姉は強い。」

私もそう思います。

「ねえキャロ、話に出るお兄ちゃんは一人だとして、お姉ちゃんは何人いるの？」

「えっと……4人だよ。」

「えっと、そうなると8人家族？」

「8人？家には6人しかいないよ。」

「えっ、それって……」

「そう、私の家には親がいないの。」

そう聞くと、申し訳無さそうな顔をする夏穂ちゃん。

そんな顔、友達にしてほしくないなあ。

「そんな顔しないで。私は今とっても幸せだし、何よりみんなに会えたから。」

「キャラ・・・」

「素晴らしい・・・」

「いい子や！」

「エローシユにキャラは渡さない。」

「フハハハ、私は欲しいものは必ず手に入れる！例え・・・あつ、ルーさん、俺のおかずそれ以上食べられるとご飯しか残らないのですが・・・」

「この世は弱肉強食、悔しかったら強くなれ。」

「じゃあ、私はソーセージ。」

「僕は、グラタン。」

「あつ、なら私は卵焼きをもらいます。」

「あああああ！？俺のおかずがあああ！！！」

この世は弱肉強食です、エローシユ君。

あつ、卵焼き美味しいです。

「や、やめてください!」

「うるせえ!いいからよこせ!」

昼食後、トイレに行った帰り道、男の子の怒声が聞こえてきました。

私は声のした方へ行くと、そこでは一人の女の子が4年生位の男子5人組に囲まれていました。

「か、返して!」

「見るよ!こいつ生意気に高そうな宝石持ってるぜ!」

「本当だ!すごい高そう!」

「お願いします、返してください・・・」

「へん、俺にぶつかった罰だ。これは俺が没収する。」

「!?!返して!」

「うるせえな!」

そう言って腕をつかんできた女の子を突き飛ばしました。

上級生なのに!!

「何してるんですか!?!」

私は注意しようと走って行きましたが、

「おい、これ以上は面倒だ行こうぜ。」

そう言っつて男の子は行ってしまいました。

くっ、顔が見えなかった・・・

「大丈夫ですか?」

「ぐすつ・・・えつぐ・・・有栖さん?」

「真白さん?」

絡まれていた女の子は真白雫さん。
私のクラスメイトでした。

いつも物静かで少しみんなから距離を置いているような子だったので、話すのは今回が初めてです。

「どうしたんですか?」

「私の大切な物を取られちゃって・・・」

「大切なもの?」

「蒼色の宝石・・・」

そう言えば宝石がどうか・・・

「どうしよう・・・あれないと・・・」

目に涙を一杯に貯めて泣きそうになっています。

手伝ってあげたいけどどうしよう・・・

「どうしたんだ!？」

そんなとき、慌てた様子でエローシュ君がこっちにやって来ました。
・・・

「・・・なんのつもり？」

五時間目の授業をしにきた細野先生が言いました。

教卓にはエローシュ君が立っています。

「先生ごめん、今から大事な話があるんだ。少し時間を貸してくれ。」

いつもとは違う雰囲気のエローシュ君に私とルーちゃんは驚いてます。

「みんな聞いてくれ！！さっきの昼休みに俺達クラスの仲間、真白ちゃんが上級生の男の子5人組相手にいじめにあっていた。その時真白ちゃんの大切なものがその男5人組に取られた。これは俺たち1年1組に対しての宣戦布告だ！！俺は断じてクラスの仲間をいじめたやつを許せない！！だからみんな、俺と真白ちゃんに協力してくれ！！」

エローシュ君はみんなに頭を下げてお願いしています。

何かかつこいいです。

「・・・何水臭いこと言ってるんだよ。」

「そうだけ、同じエロ紳士同盟の仲間じゃないか。」

「それにエローシュ君に振り回されるのはいつものことだしね。」

「私もこのクラスのためなら力を貸すよ！」

男の子も女の子もみんな賛同します。

こんなにエローシュ君は信頼されているんだ・・・

ただのエッチな変態さんじゃなかった。

「ありがとう、みんな。・・・それじゃあ次の休み時間に作戦を・・・」

「いいわよ、このまま続けなさい。」

「先生！？」

「本当は私が行きたいくらいだけど、あなたが行くって言うなら私はそっちを尊重するわ。思いつきりやりなさい！後のことは全部先生に任せてね。」

「ありがとう先生、大好きだ！！」

そう先生に言っつて、再びみんなの方へ向く。

「さあ、みんな、作戦会議を始めよう。」

エローシュ君による作戦会議が始まった……

放課後……

今、私達は4年3組の前にいます。

人数はクラスの半分の男の子と女の子。

先生にお願いして、帰りの会を短縮。

4年3組が終わるよりも速く、こっちに来て待ち伏せています。

『勝負はあっちの担任が職員室に戻る前までに話をつけて、返してもらう。』

これが今回の作戦目的です。

佐助くんの調べだと、宝石を奪った男の子の親がPTAの役員らしく、しかもモンスターペアレントらしいです。

PTAとモンスターペアレントは意味が分かりませんが、エローシユ君と夏穂ちゃん、先生に佐助くんは険しい顔つきになっていました。

何か良くない要因なんだと思います。

「よし終わったぞー！」

4年3組のクラスの中が騒がしくなってきました。どうやら帰りの会が終わったようです。

「よし、夏穂班、先生を確保！話が終わるまで絶対に教室から出さな！」

「……………了解！！」「……………」

「よしエローシユ班、今からターゲットに接触する！！！」

『了解、武運を祈る。』

エローシユ君は耳に付けている小型マイクで佐助君に言いました。佐助君は今一人別行動しています。

何をしてるかは先生と夏穂ちゃんしか知りませんが……何でも特別任務らしいです。

「行くぞ、みんな！！！」

私達は4年3組の中に入りました。

「何だお前ら!!」

教室の窓側、そこに5人組の男の子がいました。

「真白ちゃん、あいつら?」

「う、うん、間違いない・・・」

真白ちゃんは少し震えながら答えます。

「そうか。おい、よくも昼休みは俺のクラスの仲間をいじめてくれたな!」

エローシュ君はわざといじめたって所を強調しました。

「おい、一体何を言ってるんだ?どこに証拠がある?」

「」「」「そうだ、そうだ!」「」「」

「この子がお前らを見ている。」

「本当に俺か？お前は実際に見たのか？」

余裕の表情でリーダーの男の子が言いました。

「そう言うだろうと思ってたさ。だかな、お前らは一つミスをした。確かにいじめただけだと証拠を立証するのは難しい。だって誰も見ていなかったんだから。だけどな……」

エローシュ君は一旦切って、名探偵みたいにリーダーの男の子に指を指しました。

「お前は真白ちゃんの大事なものを奪った。……言わなくても分かるな？」

5人組はしまったって顔をしています。

「俺達の要求は2つだ。1つ目はそれを真白ちゃんに返して謝る。2つ目は俺達1年1組に一生関わらないだ。そうすれば今回は見逃す。……どうする？」

「な、何を勝手な事を言ってる！！俺たちが持つてるとは限らないだろー！！」

「だったら荷物を調べてもいいだろ？もちろん服のポケットやロッカーの中も念入りにな。」

「クソっ……」

「ど、どうする？」

「す、素直に返した方がいいんじゃないの？」

「だ、大輝君……」

「うっ、うるせえ！このままガキに舐められたまままでたまるか！！」
そう言つて大輝と呼ばれた男の子がポケットから、真白ちゃんの大
切な蒼い宝石を取り出しました。

「あっ！？」

「返すのか？」

「ああ………って素直にするかよ！！」

そう言つて窓から宝石を思いっきり投げました！！

「ああ！！」

「くはははははは、ざまあみろ！！これで証拠も無くなった！！
俺がその女をいじめた証拠は完全になつたんだよ！！ほらど
うする？どうやって俺のやったことだつて証明する？お前らの負け
だ！！」

大笑いしながら大輝と呼ばれた男の子は言いました。

「狂つたか？俺達以外にも証人はいるんだぞ？」

「お前たちこそ甘い！俺の親はPTAの役員だ。それも上位のな。
このクラスの先生含め、誰も俺に逆らえない！！」

そ、そんな！！

私は夏穂ちゃん達が確保している先生を見ると、夏穂ちゃんたちが止めているのを振り切って、教室から出ていました。

「さて、形勢逆転だな。どうする？全員で土下座したらそのクソガキ以外は許してやってもいいぜ。」

エローシユ君を指さして言いました。

どうするのエローシユ君？

「おい、どうした？せっかくチャンスを上げてるのに、不意にするつもりか？」

勝ち誇った顔でみんなに言います。

悔しい……何でこんな奴が……

どうしよう、お兄ちゃん……

「おいどうするんだよ！！いい加減にしないと全員しめるぞ！！」

『準備OKだ。』

「………了解した。」

エローシユ君？

「さて、もういい加減終わりにするか。これ以上付き合ってもらったのも悪いしな。」

いきなりエローシユ君がそんな事を言い始めました。

「何だ？いきなり壊れたか？」

「今、何時だ？」

えっとちょうど4時ですけど……

「先生の話は聞いているかい？先輩。今日はこの学校でPTAの会議をするみたいだぜ。ちょうど4時から。」

「一体何を言ってるんだ？」

「黙ってな、直ぐに分かる。……佐助、やってくれ。」

『了解。』

そう言うと、教室にあるスピーカーから音が流れ始めました。

『くははははははは、ざまあみる！！これで証拠も無くなった！！俺がその女をいじめた証拠は完全になくなったんだよ！！ほらどうする？どうやって俺のやったことだって証明する？お前らの負けだよ！！』

「何だこれ!？」

放送でさっきの話が流れて来ました。

「これなーんだ？」

そう言って取り出したのは何かの機械です。
あれって……

「もしかして盗聴器？」

「キャロちゃん正解。」

なんでそんなものが……

「しかし、こいつは本当にバカだったな！！好き勝手にペラペラ話してくれたおかげで証拠はバツチり取れた。いい仕事だぜ相棒！！」

『これくらい問題ない……』

放送を流してるのは佐助君か！！

「さて、もうお前に逃げ場はないぜ。俺達以外に先生もあんたの親もこれを聞いてるだろうな。」

「くっくっく……」

「精々親への言い訳を考えておくんだな。お馬鹿さんな先輩。」

「くそおおおおおお！！」

相手は怒りに身を任せてエラーシュ君に殴りかかって来ました！！

「エラーシュ君！！」

だけど、その拳はエラーシュ君に届く事はありませんでした。

「ぐあつ!!」

夏穂ちゃんが自分より大きい相手をぶん投げていました。

「私、家が合気道の道場やってるのよ。アンタみたいな屑野郎をぶちのめす為にね。」

夏穂ちゃん言葉遣いが……

「サンキュー夏穂。さて、俺達はクソでバカな先輩が投げた真白ちゃんの大事なものを取りに行きますか。」

「でも、宝石は……」

投げ捨てられちゃって……

「問題無いです。取り敢えず下に行こうぜ。」

そう言っただけでエローシユ君はみんなに下へ行くように指示を出します。

「馬鹿な奴だな、せつかく穩便に済ませてやるうと思ったのに……
精々、自分の罪を悔やんでな。」

そう言い残して、エローシユ君も教室を出ました。

「エローシュ。」

下に行くとルーちゃんと上に居なかったクラスメイトがいました。

みんな泥だらけです。

「お疲れ、それで見つかった？」

「これ？」

そう言つてルーちゃんは蒼い宝石を見せました。

「これです！！本当に良かった……」

真白ちゃんは大事そうに宝石を握りしめています。

「本当にありがとう。」

「気にしないで。それとエローシュ、かっこよかったよ。」

そう言つてルーちゃんはエローシュ君の頭を撫でました。

エローシュ君は恥ずかしそうにされるがままになっています。

「だけどすっかり汚れちゃったから、みんなにジューズね。」

「鬼ですか！？ルー様！！」

そのやりとりを見てみんなで笑い合いました。

「本当にみなさんありがとうございました！」

真白ちゃんはもう一度、頭を深々と下げ、みんなにお礼を言っています。

「何言ってるんだよ、真白ちゃんもクラスの仲間なんだ。気にすることないよ。」

真白ちゃんの頭を撫でながらエローシュ君が言いました。

「さて、相棒が帰ってきたらみんなで帰るか！あつ、それと……」

そこでエローシュ君が一旦話を切って、

「ミッションコンプリートだ！みんな、お疲れさま！」

その一声にクラスメイトみんなで返事をしました。

私、このクラスの一員になれて本当に良かったです！！

第3話 1年1組はとっても良いクラスです（後書き）

今回出た真白雫ちゃんが最後のメインのオリキャラです。

基本、オリキャラ4人とキャラロ、ルーちゃんが進んで行くと思います。

次はオリキャラの説明です。

それと、本編を知らない人にも読んでもらいたいので、本編のキャラの説明も投稿しようと思います。

本編を読んでいる人は読まなくて良いです。

これからも本編同様によろしくお願いします！

オリキャラ紹介（前書き）

オリキャラ紹介です。

今回初めて容姿を他の作品の人物に当てはめてみましたが、こんな感じだと思ってくれればいいです。

オリキャラ紹介

エローシュ（江口伸也）

容姿　　普通。ボサボサの黒髪。

転生者。しかし、零治達とは違い、見習いの神様に転生させられた為、特典は無し。しかも自身は『リリカルなのは』の事を全く知らないし、神様にも教わっていない。

前世の知識を生かし、幼稚園では天才と言われていた。それゆえに子供っぽくないと、幼稚園では省かれていたが本人は全く気にせず、マイペースに過ごしていた。

しかし、あるきっかけで佐助、夏穂と仲良くなり、それ以来ずっと一緒にいる。

いつもは締まらないヘタレで変態のイメージがあるエローシュだが、仲間のためならどんなことでもする。その為、先生が尻拭いをするので、怒られたりもするが・・・

ただし、その分クラスメイトの信頼は厚い。統率力もあり、自身は運動があまり得意な方ではないが、その分周りを動かす。

自分をエロ紳士と言い、エロ紳士同盟を作り、その盟主。会員は1年から6年まで幅広い会員がいる。

ちなみに一応リンカーコア持ち。

「エローシュウちゃうー!」

小岩井佐助

容姿　　バカテスのムツツリーニで髪が黒。

エローシュウの親友。相棒とも呼ばれている。この歳で機械類にとても強く、盗撮するためのカメラや盗聴器まで色々な物を使いこなす。ただし、全てが長期出張中の父親の物。母親いわく、仕事で使うらしい。
それを勝手に使っている。

エローシュウとの出会いは幼稚園。あるキツカケでエローシュウと仲良くなり、それ以来ずっと一緒である。

エローシュウがエロ本などでエロの素晴らしさを教えてからエロに執

着するようになり、エローシュと共に真のエロの道を探究している。
エロ紳士同盟ナンバー2。

ちなみに鼻血は出ません。

「僕に不可能の2文字は無い……」

千歳夏穂

容姿 けいおんの溼を小さくした感じ。ただし、性格は強気。

エローシュと佐助と幼稚園からの付き合い。

佐助同様に、とあるキツカケによりエローシュと仲良くなり、それ以来一緒にいる。

姉御肌で強気。クラスの信頼も高く、みんなの相談役。
それゆえ、お節介なところがある。

エローシュいわく、姉御肌でお節介は女戦士。

家が合気道の道場をしているため、彼女自身も合気道が強い！

普段はエローシュに厳しく当たるが、エローシュの事を大事に思っている。

1組の特攻隊長。

エロ紳士同盟の一番の危険人物。

「うるさいわよ、エローシュ！」

真白雫

容姿 S O 2 のレナ。ただし、耳も普通で髪も少し青みかかった黒。頭に月のアクセサリーを付けている。

性格は大人しく人見知り。それによりクラスに余り馴染めずにいた。上級生に苛められてる所をキャラロが見つけ、それをエローシュ率いるクラスみんなに助けられた事により、クラスに馴染むようになる。

クラスで唯一エローシュの事を名前で呼ぶ人物。

蒼い宝石を大事に持っており、それはなんなのかはまだ不明。親は母親しかいない。

「伸也くん、大丈夫？」

細野霧子先生

容姿 シティーハンターの冴子

1年1組の担任。

歳は24と、若いながら、ベテランの先生並の雰囲気を持つ。

エローシユにとって一番頭が上がらない存在。

子供の主張を一番大事にする人で、その尻拭いを率先してやってくれる。

なお、シャイデとは飲み仲間で、飲みに行ったりする。

「やるからには徹底的にやりなさい！」

オリキャラ紹介（後書き）

こんな感じですかね。

これは現時点です。

なので真白ちゃんの説明が少なかったり、過去に何があったなどは謎のままです。

さて、次は………考えてない……

まあ真白ちゃんを含めた6人のくだらない会話になると思います。

第4話 異端審問会ってなんですか？（前書き）

こんにちはblueoceanです。

今回は……特に何とも。

ほのぼの行きます〜

第4話 異端審問会ってなんですか？

「おはよう真白ちゃん。」

「おはようキャラコちゃん、ルーちゃん。」

「おはよう。」

朝、登校中に真白ちゃんに会いました。
前の事件の後からとても仲良くなっています。

「今日は体育だね。」

「私、運動苦手なんだ……。」

真白ちゃん、どろけいの時もへ口へ口だったもんね……

「キャラコはどう？」

「私は授業は何でも好きだよ。………国語以外。」

「そうだね、国語以外……。」

何であんな授業あるかな……
この前の朗読の時も何度も噛んじやって恥ずかしかった……

「漢字多過ぎるよね……。」

「これから先ずっと覚えるみたいだよ……。」

真白ちゃんからそう聞いて、私とルーちゃんは揃ってため息を吐きました。

「だ、大丈夫だよ。普段から使うからきつと覚えるよ。」

「本当かな・・・?」

「真白ちゃんの言うことは信頼できる。」

「ちなみに信用できないのは?」

「エローシユ。」

即答でした。

「そんなことないよ!! 伸也君は信用できるよ!!」

「信頼は出来るけど信用は出来ない。」

ルーちゃんはエローシユ君の事となると辛口になります。

「そんな事無いよ!! 伸也君は良い子だつて!!」

そうだ、真白ちゃんはエローシユ君の事を伸也君と呼びます。

エローシユ君が名前なのにどうして・・・

・・・あれ?

「ふうくん……」

そんな真白ちゃんにルーちゃんは近づいて耳元で何か言いました。あつ、顔が湯でタコみたいに赤くなった。

「何を話したの？」

「秘密。」

ルーちゃんはご機嫌な顔で言いました。

うくん、気になる……

そして、体育の授業……

「行くぞ！！俺のこの手が光って唸る！お前を倒せと輝き叫ぶ！必殺！！シャイニングファイ」さっさと投げる。「……ゴメンナさい」

ルーちゃん相変わらず厳しい。

だけど、なんだろうな？光って唸る？魔法？

「コホン、気を取り直して……そりゃ！」

エローシュ君の投げたボールは私の方に飛んできました
でもこれくらいなら……

「……よし！」

しっかりキャッチ出来ました。

「くそつ、やつぱりあれくらいじゃ取られるか……仕方ない、
今度は本気を出す！！流派東〇不敗の最終奥義、石破ふべっ！？」

あつ、私の投げたボールがエローシュ君の顔に……

「す、すみません！大丈夫ですか！？」

「大丈夫よ、こいつはこれくらいじゃ倒れないわ。意外とタフなの
よ。」

夏穂ちゃんがそう言いますが、やつぱり心配です。

鼻血、出ていなきゃいいんですけど……

「くつ、ハハハハハハハ！甘いわ！！それくらいのヒョロ玉で
は我を倒すことなど不可能！！」

エローシュ君は何事もなかったかのように立ち上がりました。

全然平気ですね。

「エローシュ君、顔面だからセーフ。」

「フハハハハ！次はこっちの番だ！！」

そう言つてボールを投げました。
さつきより速いです。

だけど………

「なっ！？」

エローシュ君も驚いています。

「遅い。」

ルーちゃんが簡単にキャッチしたからです。
流石ルーちゃんです。

「今度はコツチの番。」

ボールを右手に持って構えます。

「待つて、ルー！」

そう言つて夏穂ちゃんはルーちゃんに耳打ちをし始めました。

「それ面白そう。」

ニヤリとルーちゃんは夏穂ちゃんの言ったことに賛成したようです。

「それじゃあ………えい。」

ルーちゃんもボールを投げました。
ボールは真っ直ぐエローシュ君の顔に・・・

「ぎゃば!?!」

直撃しました。

「エローシュ君、顔面だからセーフ。」

先生がそう言いますが、当の本人は痛くて直ぐに動けません。

「えいつ!」

相手の女の子が投げたボールを夏穂ちゃんがキャッチ。

そして・・・

「行くわよ、エローシュ!」

「えっ?」

そう言ってこっちを向いたエローシュ君の顔面にボールが真っ直ぐ・

「ぎゃあ!?!」

直撃しました。

「エローシュ君、顔面なのでセーフ。」

「痛てえ・・・」

本当に痛そうにしています・・・
ちょっとかわいそうになっってきました。

「行くよエローシュ！」

敵のボールをキャッチしたルーちゃんがすかさず、エローシュ君の顔面目掛けて投げました。

その顔が笑顔だったのは気にしないことにします・・・

「あぎゃあ!!」

「エローシュ君、顔面なのでセーフ。」

先生も無慈悲です・・・

「まだまだ!!」

そう言っただけでまた夏穂ちゃんがボールを投げました。

しかし、そのボールはエローシュ君の顔から外れ、右肩に当たりました。

「しまった!?」

2人は声を揃えて言いました。

しまったって・・・

でもこれでエローシュ君も……

「……………セーフ。」

救われませんでした……………

佐助君が見事にダイビングキャッチ。
これによりエローシュ君、セーフです。

「俺は助けてくれてこんなに怒りを抱いたのは初めてだよ……………」
「
でしょうね。」

佐助君がこっちを向いてVサインしている辺り、確信犯だと思います。

そして、その後もエローシュ君の地獄は続きました……………

お昼休み……………

「全く、酷すぎるだろお前ら。」

「しゅめん、やり過ぎた。」

「まあ、たまには良いじゃない。」

「そのたんびに傷だらけになる俺って・・・」

「ドントマインド、エローシユ君。」

「キャラちゃん、何で略さないの!?!」

ちよつとした気分です。

「クソっ、グレてやる・・・」

そう言つて後ろを向いて黙々と食べ始めました。

流石にちよつとからかい過ぎたかな・・・

「エローシユ、これあげるから機嫌直して。」

ルーちゃんが珍しくエローシユ君に優しくしています。

「べ、別にそんなんで許してもらえるなんて思つなよ・・・」

と言いながらも嬉しそうです。

「つて、ご飯じゃねえか!?!ご飯なら一杯あるんだよ!?!」

「それじゃあ交換でこれもらつね。」

そう言つてルーちゃんは唐揚げを取りました。

「あっ、また!?!」

「じゃあ私も、ハイ。」

「ってまたご飯!？」

「私も唐揚げもらうわ。」

「止めてくれ!!また俺のおかずが・・・」

「僕も・・・」

「相棒!!流石に取りすぎだろ!?!ソーセージと卵焼きのダブルとか鬼畜すぎる!!」

「私はこのグラタンを・・・」

「キャラちゃんまで・・・」

私もご飯とグラタンを交換しました。

「伸也君、私のおかず分けてあげるから・・・」

「ああ・・・ここに女神様がおるわ・・・」

泣きながら、真白ちゃんにお弁当のおかずを分けてもらうエロージョ君。

真白ちゃんも嬉しそうだ。

「・・・フン。」

けれど、そんな様子を見ていた夏穂ちゃんは何だか不機嫌そうです。

「面白くなりそう……」

「どうなるんだろうね……」

佐助君とルーちゃんは2人で何やら話しています。

あれ？

私だけ仲間外れな気が……

放課後……

「何でエローシュ君、磔にされてるの？」

「と니까どこからあんなもの出したの？」

私とルーちゃんがトイレに行っている間にエローシュ君が十字架に磔にされました。

「あわわ、どうすれば……」

「真白ちゃん、一体何があつたの!？」

「あつ! キャロちゃん、ルーちゃん!！」

私たちに気づいた真白ちゃんが慌てて近づいて来ました。

「あのね、私がエローシユ君にこの前のお礼として作ったミサンガを渡したら、それを見ていた男子のみんながあつという間に大きな十字架にエローシユ君を……」

何か色々と突つ込まなくちゃいけない気がするけど、取り敢えずエローシユ君が先だね……

「ルーちゃん……」

「面白そうだから傍観しよう。」

「「ルーちゃん!？」」「

まさかの傍観!？」

「それでいいわよ。」

「夏穂ちゃん!？」

いつの間にか後ろにいた夏穂ちゃんが言いました。

「エローシユは普通の人より頑丈……」

その隣にいた佐助君もそう言います。

それは体育の時間に聞きましたが……

でも、付き合いが長い二人が言うなら大丈夫かな……

「只今から異端審問会を始めます。」

そう宣言して、磔されているエローシユ君の前にいる男の子達は頭に黒い頭巾を被り始めました。

「被告、エローシユ。貴殿はエロ紳士同盟を作りながらもリア充になろうとしていた。盟主自ら盟約を破った行為は我ら同盟の裏切りに値する！……何か言いたい事はあるか？」

「俺のどこに盟約に違反した証拠がある！！証拠の提示を要求する！！！」

「ではこれはなんだ!？」

そう言っつて裁判官？をしていた男の子がミサンガをエローシユ君に見せてきた。

「それは真白ちゃんからお礼として貰ったものだ。そのどこに違反がある!！」

「女の子から贈り物、それはリア充の仲間入りの意味を示すって兄貴が言っていた。だから違反だ!！」

「それはお前らが俺に勝手に嫉妬しているだけだろうが!!」

「……………うっ……………」

「それに俺が作った盟約にはそんなものは無い!!」

「でも理不尽だ!!俺たちも手伝ったのに、俺たちには何も無いなんて……………」

「……………そうだ、そうだ!!」

「それは……………日頃の行いが悪いからだ。」

「……………お前にだけは言われたくない!!」

その気持ちは分かります。

「あ、あの!!」

真白ちゃんは精一杯大きな声を出して、異端……………なんだっけ?

と、とりあえず話しかけました!!

「皆さんにもお礼はあります!クッキーですけど要りませんか?」

「……………いりま〜す!!」

みんな被っていた頭巾を取って、真白ちゃんの所へ群がって来まし

た。

変り身が早いですね……

「キャラちゃん達もどう？」

「ありがとうございます！」

「美味しそう。」

「本当ね。」

「良いお嫁さんになれる……」

「えへへ……」

「おい、誰か俺を下ろしてくれよ……！」

私達はみんなで真白ちゃんのクッキーを美味しくいただきました。

「ね、その頭巾って何なの？」

クッキー食べている時に近くの男子に聞いてみました。

「えっとね、僕の兄貴がやってるんだけど、SBS団ってやつ你真

似事。何でもリア充の零治って人を懲らしめるために組織したんだ
って。」

お兄ちゃんの名前と同じですけど違いますよね？

第4話 異端審問会ってなんですか？（後書き）

SBS団みたいなものがこの学校にも……

けれど、零治達の方よりは過激じゃないです。

SBS団……

原作介入した神崎大悟が作った組織。

バカテスのFFF団だと思ってくれれば良いです。

零治は相当恨まれてます。

次もよろしくお願いします。

第5話 エローシユ君のライバル？登場です（前書き）

こんにちはblueoceanです。

今回は運動会の前の話。

エローシユのライバル？が登場します。

第5話 エローシュ君のライバル？登場です

「運動会ももうすぐね・・・」

夏穂ちゃんが自分の卵焼きを食べながら呟きました。

いつも通りの昼休み。

私達は中庭で円になってお弁当を食べていました。

運動会も、もう今週。

お兄ちゃんたちより先にやります。

初めてだし緊張します。

「体育もその行進とかで面倒だよなあ・・・何度も繰り返すからやんなるよ。」

エローシュ君の言うことも分かります。

何度も行ったり来たり。

私も正直うんざりです。

「それよりエローシュ、二組からこんなものを受け取った・・・」

そう言って佐助君が折りたたまれた紙をエローシュ君に渡しました。

一体何だろう・・・

「はあ……懲りない奴だな。」

「何よ一体……」

そう言った夏穂ちゃんにエローシュ君は紙を渡しました。

「なるほど……面倒ね。」

「一体何なんですか？」

私は我慢しきれなくなつたので聞いてみました。

「ああ、転校してきた二人は知らないよな。真白ちゃんも直接関わって無いから知らないかな？」

そう言つて私達に手紙を見せてくれました。

『今回の運動会で決着を付けるぞエローシュ！！勝つた方が夏穂さんをいただく！！』

エローシュに対しての果し状でしょうか？

でも、『夏穂さんをいただく』ってというのは……？

「これを渡してきたのは西條清孝。隣のクラスの金持ちなんだけど、いつの間にか夏穂に惚れたらしくて、何故か俺を目の敵にしてくるんだよ……」

「エローシュのライバル？」

「俺はそう思っていないんだけど、相手の方は思ってるらしくて・・・
一回負かせただけだしつこくてしつこくて・・・」

「夏穂ちゃんは告白されたの？」

真白ちゃん直球です。

「されたけど断ったわよ！！誰があんなキザでドリル男・・・」

ドリル男？

「だけど玉の輿。」

「そんなの関係ないわ！！実際に会ってみれば3人も分かると思うわ。エローシユが可愛いくらいよ。」

「俺と比べるなよ！俺が可哀想だろ！」

「否定できない・・・」

どれだけ嫌われてるんでしょうか・・・
何だか少し可哀想です。

だけど・・・

「断ったのにしつこいのはある意味嫌ですね。」

「そうよね・・・何であんなにしつこいのかしら・・・」

「夏穂ちゃんって結構モテるよね。」

真白ちゃんが不意にそんな事を言いました。

その時、エローシユ君の目が光ったのを私は見逃しませんでした。

「真白ちゃん詳しく教えてくれ!!」

エローシユ君が真白ちゃんに身を乗り出し聞いてきます。

「え、えつとね、今朝も下駄箱に……」

「言っちゃダメ! 霰!!」

「いいこと聞きましたな。」

「重用情報……」

エローシユ君と佐助君はニヤニヤしながらそんな事を言いました。
さっきの話の先が分かったのかな?

「ルーちゃんは分かった?」

「キャラは分からなかったの!？」

あれ? 驚かれる事かな?

「キャラ、今度漫画貸すから読んで。」

「えつ! ? あ、ありがとう……」

勢いよく言われたので断る余裕もありませんでした。
まあ断る理由も無いのですが……

「夏穂さん!!」

放課後の事です。

今日も授業が終わり、帰りの支度をしていた時でした。

後ろのドアから夏穂ちゃんを呼ぶ声が聞こえたと思って見てみたら、白いスーツを着て、頭をトンガリにして固めた男の子がいました。

立派なドリルです。

「今度の運動会で僕の素晴らしさを見てもらい是非、結婚を前提としたお付き合い……」

と、そこまで言って固まりました。

あれ？私が見られてるような……

「あ、あなたお名前は……」

「えっ!?!私ですか!?!」

「そつです……」

「あ、有栖キャラロですけど……」

「ぐおっ!?!」

そう言うとドアにもたれ掛かってそのまま床にズルズルと倒れていきました。

ああ、白いスーツにホコリが……

「可憐だ……」

「えっ!?!」

「何て可憐なんだ!!是非僕と結婚を前提としたお付き合いを……グフオ!?!」

そこまで言うと、飛んできたランドセルが顔面に当たり、後ろに倒れました。

「キャラロは渡さない!?!」

「ルーちゃん、やりすぎ!?!」

投げたのはルーちゃんでした。

流石にやりすぎじゃ……

「誰だい、こんなものを……」

あれ？案外平気でした。
簡単に立ち上がります。

そうして、今度はルーちゃんを見て固まりました。

「妖美だ……」

あれ？何かまた同じ光景を見ているような……

「何て妖美なんだ！！失礼ですがお名前は……」

「お前に名乗る名前なんてない。」

ルーちゃんは即座に教えるのを拒否。

「素晴らしい、これがツンデレと言う奴なのか？このクラスは本当に素晴らしい子ばかりだ！！」

絶対に違うと思いますが……
何だか危ない気がします。

「何なのこの気持ち悪いのは……エローシュより酷い。」

「エローシュと言ったか！？クソっ、またしても奴か！！だが恋は障害があったほうが燃える！！今度の運動会での僕の活躍、とくと見ていてください！！」

そう言ってハッハッハと笑いながら消えるドリルの男の子。

結局何だったのでしょうか？

「何考えてるのかしらアイツ……」

「2人共、あれが昼休み話していた奴よ。」

「えっ、彼がですか!？」

確かにおかしい人でした。

夏穂ちゃんが言うだけあります……

「エローシユ以上の変態を見たのは初めて。運動会前に闇討ちしようかな……」

「駄目ですよ、ルーちゃん!!夏穂ちゃんも『その手があったか!』って顔しないでください!!」

2人共暴力は駄目です!!

「3人共どうしたんだ?」

そんな時、エローシユ君が真白ちゃんと教室に帰ってきました。

「へえ、俺たちが日誌を渡しに行く間にそんなことがあったのか……」

「そうなんですよ……」

さっきの出来事をエローシユ君に話しました。
真白ちゃんも私達と同じ気持ちみたいです。

「アイツは……さて、これはどんなことをしても負けられなくなっただな。」

えっ、何で!?

「そこまでの事じゃ無いと思う。」

私もルーちゃんの意見に同意します。

「ダメだな。ああいう奴は一回勝つと、勝手にした約束を本気に思っ
つて、更にしつこくなるぞ。」

「そうなんですか!?!」

「ああ、だからウチのクラスのマスコット、キャロちゃんとクール
ガール、ルーちゃんは俺達が守らないと。」

「いつの間に変なあだ名を……」

ルーちゃんも流石に驚いていますが、案外嬉しそうです。

マスコットか……

トッキー？

いや、私は女の子ですからトッキーですね。

あんまり嬉しくない……

「何でキャロちゃんに睨まれてるのか分からないけど、明日はみんなで会議だな。」

「で、どうするのよ。」

「取り敢えずどの競技も絶対に勝たせない。それが最低条件だな。まあ対策は相棒と作戦を練っておくよ。」

「先生に迷惑をかけないようにしなさいよ……」

「むしろ、もつとやれ！！って言われそうだけど……」

この前私とルーちゃんも実際に見たのですが、担任の細野先生と隣のクラス（ドリル頭の男の子のクラス）の担任のはげ山……オホン。

竹山先生は犬猿の中らしいです。

私達が見た場面は嫌味を言い合ってる場面でした。ものすごく大人げなかつたです。

帰ってきてから細野先生は最初の授業の5分をずっと愚痴ってました。

要するにそれほど毛嫌いしています。

「まあ俺に任せてくれ。」

エローシュ君は頼もしく言い切りました。

今度はどんなことをするのか楽しみですが、本当に必要なのかな？

夜………

「みんな、出来たわよ〜」

星お姉ちゃん呼び声にみんなが動き始めます。

「ライお姉ちゃん、ご飯だつて……」

「ちよつと待つて！今重要な所！！」

確かに今重要な所です。

タOガス対スOローズ、六回表で2 - 1、タOガスリードですが、ピンチです。

1アウトランナー1塁3塁でスOローズの4番畑山です。

私はライお姉ちゃんと、タイガースのユニフォームと帽子、メガホ

ンを持って応援しています。

「ここで誰が出てくるかな？」

「私は江原辺りだと思っんですけど・・・」

相手バッターは右バッターなので左ピッチャーをぶつけると思うのですが・・・

でも今年の左の中継ぎはあんまり成績が良くないので不安です。

今日の試合は負けると4位になるかもしれない試合なので絶対に負けられません!!

『えつとピッチャーを変えるようです・・・おっ!?!ここで怪我で調整中だった、筒居をマウンドに上げてきました!!』

「キャロ!!」

「はい!!筒居なら絶対に抑えてくれます!!」

筒居は左の先発の柱です。

本当はローテーションの中でチームを引っ張る筈だったのですが・・・

シーズン序盤にケガをしてしまい、今日までずっと2軍にいました。

でも帰ってきてくれて本当に良かったです!

「あつ、CMに入ったね。それじゃあご飯食べながら見よう!」

「はい!」

「お前ら……」

「あ……」

「準備くらい手伝え〜!!」

「ごめんなさい!!」

お兄ちゃんにこっぴど怒られてしまいました。

けれど、筒居が見事に抑えてくれてタオガースは勝てました。

本当に良かったです!

「そういえば、フェイトから聞いたんだが、エリオが運動会見に来るらしいぞ。」

ご飯を食べ終え、くつろいでいたら、お兄ちゃんが不意に言いました。

「本当ですか!?!」

夏休みの別荘へ行って以来会っていないのでとても楽しみです!

……そういえば、

「エリオ君は学校には行かないのですか?」

「エリオは管理局に入隊するつもりらしいぞ。」

「そうなんですか……」

「一緒に行けたら楽しそうだったんだけどなあ……」

「まあエリオにも目標があるんだよ。応援してやるうな。」

「はい!」

一方、アルピーノ家……

「よっし、ここで畑山が打てばジャオアンツが3位に……」

「そんな事させない……」

ゼストはジャオアンツファンだ。

あの金持ちチームのどこがいいのか分からない。

確か、小松原が粹で良いって言ってたけど……

「私にも負けられない戦いがここにある!」

「ふっ、言うようになったなルーー!!」

「どうでもいいけどご飯よ二人共。」

そんな2人をテーブルのイスに座って呼ぶメガー又さんの姿があった。

「くっ、これでジャロアンツが4位か・・・」

「ふっふっふ、これぞ虎の底力。」

「ルー、こぼしてるわよ。」

「・・・ごめんなさい。」

注意されて私は自分のこぼした夕食を拾う。

「お茶のおかわりはいかがですか？」

「ああ、もらおう。」

お母さんはゼストの湯飲みにお茶を入れる。

こう見ると夫婦にしか見えないんだけど・・・

一体いつになったら結婚するのだろう・・・

「ルー、あなたは？」

「豆乳頂戴。」

「はいはい。」

少し苦笑いしながら私に豆乳を入れてくれた。

いいじゃない、豆乳好きでも……

「ガリユー、これお願い。」

コクっとうなづいて、空になったお皿をキッチンに運んで行き、

「……」

お皿を綺麗に食器洗浄機に入れ始めた。

「いつもありがとうガリユー。」

「……」

無反応みたいに見えるけど、気にするなと言っていると思う。

本当はゼストがやるって言うていたんだけど、食器洗浄機の使い方がイマイチ分からなくて、結局ガリユーにやってもらってる。

ガリユーは何でも出来るからね。

「そついえばルー、もうすぐ運動会よね？」

「そつだよ。」

「お母さんとゼスト隊長も見に行くから頑張つてね。」

「うん、頑張る。」

「ただあのドリルには気を付けないと……」

「後、当日エリオ君も見に来るらしいわよ。」

「エリオ来るの？」

「零治君がそう言ってたわ。ねえ、どんな子？」

「どんな子？えつと……」

「とても真面目で恥ずかしがりや。優しく、結構イケメンで、将来はモテモテの予感。だけど女性関係はレイ兄と同じになりそうなのがする。」

「えつと……」

「どこから突っ込めばいいのか……」

でも私の考察は間違っていないと思う。

「ま、まあ仲良くね。」

「うん。」

クラスの女子に紹介してみようかな？

そうしたらエリオが男子に殺されちゃうか。

だけど、逆に返り討ちにしようだな……

その後もルーテシアはエリオが来たとき、どうするか考えていたの
であった。

第5話 エローシュ君のライバル？登場です（後書き）

こんな感じでエローシュがまたやらかします。

と言っても前みたいに大掛かりな事ではありませんが……

それと、エリオにも軽くフラグを。

何のフラグが分かると思います。

次もよろしくお願いします。

第6話 運動会です！（前編）（前書き）

こんにちはblueoceanです。

長くなりそうだったので、分けました。

それではおついで・・・

第6話 運動会です！（前編）

「ふあゝあ……」

私は大きく背伸びをして、ベットから出ます。

時刻は6時30分。ちょっと起きるのが早かったですね。

「いい天気。」

カーテンを開けると、お日様が上がっていました。

今日は晴天みたいです。

「今日は頑張るぞ……」

私は静かに気合を入れました。

「じゃあ応援に行きますから頑張ってください。」

「はい、行ってきます!!」

私はみんなに見送られ、家を出ました。

今日はエリオ君だけじゃなく、管理局で忙しいフェイトさんも来てくれるみたいです。

桐谷さん達も来てくれると言っていましたし、かなり大勢です。ただそれがまた嬉しかったり……

「おはようございますー!!」

「おはようキャラ口ちゃん。ごめんね、ルーまだ準備が終わってなくて……」

「大丈夫です、いつものことですから。」

「それが困ってるんだけど……」

メガー又さんが申し訳なさそうに言います。

別に気にしないのですが……

ちょっと奥を見ると、ガリユーさんが慌ただしく動いてました。

ルーちゃんが言うには、最近はず夫が板に付いてきたって言うてました。

それでいいんでしょうか……

「おまたせ。」

「うん、それじゃあ行こうー!」

ルーちゃんが来たので、私達は学校に向かいました……

教室に来てみると、既にエローシュ君と佐助君が来ていました。

何やら、紙を見て、話し合ってます。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「ああ、おはよう二人共。」

「おはよう……」

「早いですね二人共。」

「ああ、最終確認をしている所だからな。だけど問題は……」

「玉入れと綱引き……」

問題……？

「何かまずいの？」

「ああ、この二つはクラスで競うだろ？実は2組は運動神経いい奴が多いんだ。」

そう言っつて一枚の紙を見せてきました。

どうやらスポーツテストのデータの比率みたいです。

「2組凄いですね。」

「それに比べて1組は低い……」

「インドア派ばかりだからな……」

インドア派の意味は分かります。

確か……家にずっといる人だったはずです。

「一応対策はある……」

「だけど、それがうまくいくかは相手次第……」

要するに不安つて事ですね……

「大丈夫。」

「ルーちゃん？」

「こっちには強い味方がいる。」

「「味方？」」

「エリオ。」

「……………えっ？」

「無理だつて！！そんなのバレるよ！！」

私達はエリオ君を見つけて、校舎裏に連れてきました。

「お願い、エリオの手を借りないとまずいかもしれないの。」

「だけど、僕はこの学校の生徒じゃないんだよ！！絶対にバレるって……」

「大丈夫、エリオはかつこいいから問題ない。」

「大有りだよ！！」

ルーちゃんがいい考えあるって言うていたので何か考えがあると思っ
てましたが、無計画でした。

「仕方ない、それじゃあ変身魔法で……」

「そんな魔法ありましたっけ？」

「……知らない。」

「知らないのに言ったの!？」

ダメそうですね……

「もう、つべこべ言わず、来る!！」

そう言っつてルーちゃんが無理やりエリオ君を1組の教室へ連れて行ってしまいました。

本当に大丈夫かな？

その頃、フェイト達は……

「零治、エリオが居なくなっただの!！」

「えっ!?! 迷子か？」

「多分……お願い、探すの手伝って!！」

「分かった。」

エリオを探して、走り回っている中学生組がいた……

「皆に紹介する、エリオ・モンデヤル君だ!!」

「モンデヤルです!!」

「最低……」

「ちょっと!? 女子の皆さん、そんな冷たい目で俺を見ないで!!」
自業自得です。

「オホン……で、このモンデヤル君が助っ人として手伝ってくれることになった! ルーちゃんが言うには運動神経はルーちゃんよりもずっと上で、しかもイケ……」

あれ? 何か顔が暗くなったような……

「イケメン……」

そう言って崩れていきました。

「そうだな、我もここまでとは思ってなかった。」

ライや夜美も同じみたいだな。

「だけど楽しそうだな。」

見ていたフェリアが不意にそんな事を言う。

「そうですね。」

「そうだね。」

「だな。」

俺も同意見だ。

キャラはとても和かにクラスの仲間と話している。

ルーは・・・何か男の子にちょっかい出してるな。

「まあ楽しそうで何よりだよ。」

俺の言葉に星達4人は頷いたのだった。

零治SIDE END

「先ず第一関門だな。」

「いい加減覚悟を決めるべき。」

ルーちゃんはそう言つてエリオ君の背中を叩きました。
エリオ君は痛みで咳き込んでます。

ちなみにエリオ君は杉山君の体育着を借りてます。帽子も深く被つ
ているので分からないと思うのですが・・・
杉山君とそこへ両親には既に了承済みらしいです。

場所は一番前。

その横に私で、後ろにルーちゃん、その横にエローシュ君です。

ご両親まで話をする辺りは、流石エローシュ君です。

「頑張ろうエリオ君。」

私はエリオ君の背中をさすりながら言いました。

「ありがとう、キャロ。」

そう言つて笑顔で返してくれました。

えへへ・・・

ちょっと恥ずかしいです。

でも後ろの女子から睨まれてる気がしますが、気のせいですよね？

「それじゃあ、よい……」

パン！！

ピストルの音が鳴り、一斉に引き始めます。

うわっ！？強い……

「行くぞ！！オーエス！オーエス！」

エローシュ君の号令に皆が合わせます。

だけど……

「動かない！？」

綱はびくともしません。

あつちはコッチよりバラバラなのですが、それでも綱は動きませんでした。

「エローシュ、このままじゃまずいわよー！……」

夏穂ちゃんの焦った声が聞こえてきます。

確かに不味いです。

コッチは力の無い分、チームワークで補っていますが、元が低い分、長く持ちません。

このまま長期戦になれば、こっちが不利です。

「分かってる！！みんな頑張ってくれ！！」

そう言っただけでまた掛け声を上げます。

でもやっぱり綱は動きません。

「くそ、このままじゃ・・・」

流石のエローシュ君も予想外だったみたいです。

「・・・仕方ないか。」

エリオ君？

「ビリっとするかもしれないけどごめんね・・・」

エリオ君は何を言ってるのでしょうか？

すると・・・

「痛っ!?!?」

相手の先頭の子が痛がって綱を離しました。

「今だ!?!」

エローシュ君の声に皆が反応しました。

一斉に綱を引きます。

中心のリボンは私達の陣地へ入っていき・・・

「えっと、魔力変換資質・・・でしたっけ？」

「うん、そうだよ。」

どうやらエリオ君は相手の一番先頭の子に電気を流したらしいです。

だからあの時、綱を離したのか・・・

「けれどよくやった、エリオ。」

そう言っつてルーちゃんはエリオ君の頭を撫でました。

「やっぱりエリオが居てくれて助かった、ありがとう。」

「べ、別に僕は出来る事をしたただけだから・・・。」

エリオ君は少し照れながら言いました。

だけど、実際にエリオ君が居なかったら負けていたかも・・・

「ありがとうねエリオ君。」

「キャラ口まで・・・つてそれより行かなくていいの？徒競走直ぐだっつて書いてなかった？」

「あっ、そういえば！！」

「そうだ、キャラ口行こう。エリオ、また後で。」

「うん、頑張つて二人共。」

私達は急いで1組に戻りました。

「エローシユ君……」

エローシユ君の同じ順番にドリル君がいます。

エローシユ君は運動は得意な方では無いので心配です……

「夏穂ちゃん、あのドリル君って運動出来るの？」

「エローシユよりは出来ると思うわ。」

真白ちゃんが夏穂ちゃんに質問しました。

結果は最悪ですね。

一体どうするのでしょうか。

そう思つてるとエローシユ君の番が回ってきました。

すると、エローシユ君はいきなり座り込みました。

どうしたのでしょうか？

「おいエローシユ、一体どういつつもりだ!？」

「これでいいんだ。いいから構えろよ。」

「ふん、その分だと勝負を諦めたみたいだな。」

「さあ、どうかな・・・」

ニヤリとエローシュ君は笑いました。

そして右足を後ろに伸ばし、両手を地面に付けました。

「失望したよ。僕のライバルの君がそんな変な格好をするとは・・・
・だけど、容赦はしないよ。『いつ何ときでも力を抜くな。』それが家の家訓だからね。」

嫌な人ですね・・・

何でエローシュ君は言い返さないのでしょうか？

「位置について・・・」

そうこうしているうちに始まるみたいです。

「よっい・・・」

パン！！

ピストルの音と共に一斉にスタートしました。

「なっ!?!?」

ドリル君が驚きの声をあげました。

何故なら……

「行つくぜー!!」

エローシュ君が先頭だからです。

結果、エローシュ君は見事1位でした。

「何でお前が1位なんだ!! フライングしたんじゃないのか!?!」
私が走り終わると、ドリル君がエローシュ君に対して怒っていました。

あっ、ちなみに私はぶっちぎりの1位です。

……ごめんなさい、何とか1位です。

「フライングしたんだろっ!!そうに違いない!!じゃなかったらあんな変な格好だったお前に負けるはずが無い!!」

もう言いたい放題ですね。

………かつこ悪いです。

「もううるさい、行こうエローシュ……」

そうやってエローシュ君を連れ出したのは佐助君です。

いつも余り感情を出さない彼ですが、相当頭にきてるのが分かりません。

まずいと思ったのか、ドリル君は後を追いかけてませんでした。

「くそっ……あつ、キャラさん、ルーさん、夏穂さん!」

私達に気がついたみたいでこっちに来ます。

「どうでした?僕の活躍。」

どの口が言うのでしょうか。

2人も思うことが同じみたいなので、3人一緒に……

「……最低!!」「……」

と言ってやりました。

ボケっとしてるドリル君を見て気分がよかったのは内緒です。

第6話 運動会です！（前編）（後書き）

今回出ませんでした。次には出る本編キャラの説明を軽く・・・

加藤桐谷

ゴールデンウィークにこっちに転生した、前の世界の零治の親友。

佐藤加奈

桐谷と同じ、ゴールデンウィークにこっちに転生した。前の世界だと零治の妹。

ダメっ子3シスターズ

セイン、ノーヴェ、ウエンディからなる3人。

本当に軽いですが、まあちょっとくらいしかでないと思つので問題無い筈・・・

次もよろしくお願いします。

第7話 運動会です！（後編）（前書き）

こんにちはblueoceanです。

まず始めに今回出てくる本編キャラ、加藤家を軽く説明。

加藤桐谷

零治の転生前からの親友、零治を追って、こっちの世界に転生してきた。

佐藤加奈

零治の転生前の実の妹。桐谷と同じ時期に兄を追って、こっちの世界に転生した。

セイン

数の子の6番目。ダメっ子3シスターズが一番上。
天然であり、時に大事な事をポロっと言ってしまうたりする。

ノーヴェ

数の子の9番目。ダメっ子3シスターズの真ん中。
少し暴力的で、コーヒーが大好き。3シスターズのツッコミ担当。

ウェンデイ

数の子11番目。ダメっ子3シスターズの一番下。

ナンバーズ1の問題児。やることの殆どに厄介事が付いてくる。

はやての事を姉御と呼ぶ。

とこんな感じですね。

ちなみに加奈は今回出ません。

訳は一応ありますが、別に番外ではメインで出ることも無いので説明しません。

それではどうぞ〜

「そうっス！！ノーヴェ、あれいいすよね」

「まあな、悪くないと思う。」

ウエンディとノーヴェはどうやらあの掛け声を気に入ったようだ。

「ねえレイ？」

「どうしたセイン。」

「エリオ君どこいるの？」

「エリオは……」

確か、帽子を深く被った杉山だったっけ？

「あ、あそこだ。」

そう言っただけ俺は指さした。

エリオは緊張してるのか、動きが固い。

「本当だ！あはは、動きが固い！！」

エリオを見つけたセインはエリオの様子を見て笑う。

「え、エリオ大丈夫かな……」

アワアワと慌てるフェイト。

何か孫を見ているお祖母さんみたいだ。

声に出したらただでは済まないと思う……

「おっ、始まるっスよ！」

ウエンデイの言っていた通り、校庭にいる1年生はスタンバイし終わったみたいだ。

校庭に緊張感が漂っている。

『よーい……い』

パン！

ピストルの音が鳴り、玉入れが始まった。

零治SIDE END

「よし、作戦通りにみんな頼むぞ！！」

今回のエローシュ君の作戦はこうです。

『まずは投げる組と集める組に分ける。投げる奴はソフトボール投げの成績が良かった奴とキャロちゃん、ルーちゃん、エリオ。この三人だな。後の皆はひたすら玉を集めて投げる奴に渡してくれ。そっちの方が効率よく出来る。』

パン！

ピストルの音が鳴り、私達はそれぞれの役割の為に動きました。

『投げる奴は玉入れに書かれているサークルとカゴの半分位の距離から投げてくれ。それとボールは絶対に拾わなくていい。拾うのは拾う係の奴に任せて、投げることだけ集中してくれ。』

私は言われたとおり、ちょうど中間の辺りに行きました。

「はいキャロちゃん。」

真白ちゃんにボールを渡され、準備完了です。

「よし、阪オフィアの底力みせたる！！」

私は慣れない関西弁でカゴに向かって言いました……………

零治SIDE

「見事な統率だな……………」

フェリアが驚きながら呟いた。

といつより、ここにいるみんなが驚いていると思う。

何故なら……

「投げる係！！休まずひたすら投げまくれ！！誰か！！加納の所がボールが無くなってる、補充を！！」

キャロにエローシユと呼ばれている男の子が皆に指示を出し、それに皆がキチンと従っている。

その動きに誰もが迷いの無い。

「こんな一年生がいるのだな……」

「ええ、流石にこれは驚きね……」

夫婦（まだただけど……）仲良く並んで見ていた、ゼストさんとメガーヌさんも驚いている。

そしてそれ以上に……

「キャロとルー、何であんなに投げ方が綺麗なんだ……？」

「分からない……」

桐谷が驚きながら俺に聞いてくる。

2人はとても綺麗なスナップスローでボールを次々と投げている。

その動きは熟練のセカンドを思わせる。

「一体誰が教えたんだ？」

そう思ったとき、ふと一人の人物の事が頭に浮かんだ。

野球好きで、野球がとても上手い奴……
心当たりのある人物を見ると……

エッヘンと大きい胸を更に強調させているライがいた。

零治SIDE END

パンパン！！

これで2回目も終了です。

1回目は圧倒的大差で1組が勝ちました。

2回目は、他のクラスも私達のマネをしようとして更にバラバラになり、私達以外のクラスのカゴには玉が殆ど入っていません。

数えなくても分かるほど、圧倒的勝利です。

「73、74、75……」

そこで私達のカゴが空っぽになりました。

20位で勝利が確定し、そこからみんなで盛り上がってます。

『勝者、1組！！』

結果が出ると、盛大な拍手が湧き、私達は……

夏穂ちゃんの号令の元、みんながエローシュ君を囲み、持ち上げました。

「おい、みんなやめろって……」

「行くわよ!!ワッショイ!ワッショイ!」

「ワッショイ!ワッショイ!ワッショイ!」「ワッショイ!」「ワッショイ!」「ワッショイ!」

「おい、みんなやめろって……止めるよ……た、助けにくれ!!!」

突然助けを求めるエローシュ君。

だけど、テンションの上がったみんなは聞こえてないみたいです。

「よし、みんな、もっと上げるわよ!!」

「ワッショイ!」「ワッショイ!」「ワッショイ!」「ワッショイ!」「ワッショイ!」「ワッショイ!」

「お願いマジで止めて!!めっちゃ怖いんですけど!!」

「ルーちゃん……」

「キャラ、エリオ、エローシュ面白い顔してる……」

ルーちゃんは面白いものを見るように楽しんでいます。

「ルー……鬼だね……」

エリオ君も可哀想だと思ってるみたい。

「ワツシヨイ、わ・・・へくしゅん!」

そんな時、夏穂ちゃんがかくしゃみをして掛け声が止まりました。すると、みんなの手も止まります。

そして・・・

「えっ!?!ぎゃあああああ!」

真上が上がったエローシユ君はそのまま地面に落ちていきました。

「アハハハハハハハハハ!」

「ああ・・・」

大笑いしているルーちゃんの横で、私とエリオ君はため息しか出ませんでした・・・

さて、運動会も最後のプログラムへと進んでいきました。

「大丈夫だ、佐助！」

「持ってきた……」

佐助君がいきなり現れて、何かをエローシュ君に手渡ししました。

「これは？」

「この海鳴市には面白いグッズを作ってる人がいてな。その人の発明品なんだけど、その名も『影が薄くなる！』」

裏声でエローシュ君が言いました。

しかしどこかで聞いたことがある言い方だったような気がします……

「これを使えば、いくらイケメンでも可愛い子でも注目されなくなるんだ！」

「くだらない。」

私もルーちゃんと同じです。

「作ったのは俺じゃないぞ！！ほら見る、ここにたぬき印があるだろ？ちゃんとした商品の証だ！！」

「それを見て買う2人がおかしいと思うよ……」

流石の真白ちゃんもエローシュ君に突っ込みました。

「何を言っただ、真白ちゃん。このためき印には様々な変わった商品があつて、インターネット上では予約がある程の……」

『一年生のリレーの選手は待機場に集合してください。』

エローシュ君が熱心に説明している途中にアナウンスが入りました。

「ほら、もうどうだっていいから早く行くわよ!!」

そう言つて夏穂ちゃんはエローシュ君の耳を引っ張つて行きました。

「分かつたから引っ張るな!!ほいエリオ。適当に塗っておけば大丈夫だから。」

「あ、ありがとう。」

エリオ君は影薄くなるを受け取り、移動しながら腕に塗り始めました。

つて塗るんだ……

「さあ、最後だし頑張ろうぜ!!」

さて、リレーの順番ですが、

1 夏穂ちゃん、2 佐助君、3 ルーちゃん、4 エローシユ君、5 私、
アンカーにエリオ君と言う順番です。

エリオ君がアンカーの理由は、『一番速そうだからな。』と簡単な理由でした。

エローシユ君は今回特に作戦はないらしく、『このメンツは俺以外、
学年で1、2を争う位運動神経良いから恐らく問題ないよ。』との
ことです。

「じゃあ私行くわね。」

「頑張つて夏穂ちゃん。」

「ファイト。」

リレーは一人100m、半周です。

なので抜くのは結構難しくなるので、いかに先頭をキープするかが
重要とエローシユ君は言っていました。

「よーい………」

パン！！

ピストルの音が鳴り、一気に最初の走者が走り出しました。

「夏穂ちゃん、速い！！」

「いいペース。」

そう言いながらルーちゃんが立ち上がりました。

「頑張つてね、ルーちゃん……。」

「任せて！」

ルーちゃんはサムズアップして自分のコースへ向かいました。

「夏穂ちゃん凄い……そして佐助君も速いや。」

夏穂ちゃんは先頭の役割をしっかりとやりきり、1位で佐助君にバトンを渡した。

受け取った佐助君も足が速い。

相手に追いつかれることなく、バトンをルーちゃんに渡しました。

「任せる……。」

「任せて！」

ルーちゃんも足は速いです。

恐らくクラス1だと思えます。

このままだつたら結構楽に・・・

「えっ!?!」

後ろからかなりのスピードで2組の女の子が追いかけてきました。とても速いです。

ルーちゃんとの距離を徐々に縮めていきます。

「エローシュ!?!」

「任せろ!?!」

なんとか1位を死守したルーちゃんでしたが、もう大分追いつかれてしまいました。

「ハハハハ! エローシュ、お前を抜いて目立ってやる!?!」

「喋りながら話すんじゃねえよ・・・」

相手はドリル君です。

やっぱりエローシュ君より速いのは本当みたいで、徐々に追いつかれていきます。

「キャロ、頼む!?!」

「はい!?!」

私が渡された時にはもう差が殆どありませんでした。

(ここで私が差を広げなくちゃ!?!)

そう思いながら地面を思いっきり蹴ります。

(私だってやるときはやるんだ……)

カーブに入り、私はなるべく内側を走っています。

2組の子は直ぐ後ろまで迫って来てますが、外側を走っているみたいで、抜かれてはいません。

(よし、このまま真っ直ぐ……)

後は直線一本。

エリオ君に任せれば……

その時でした。

(あれ!?)

足が何かに引っかかった!?

視線が下へと向かっています。

私はそのまま顔から転びました。

「痛……」

どうやら靴紐がほどけてたみたいです。

何で私こんな時に……

立ち上がって走ろうとしたとき、

「あっ!？」

2組の女の子に抜かれてしまいました。

「くっ!！」

私は急いでエリオ君の所に走ります。

「ごめん!！」

「任せて!！」

エリオ君は私からバトンを受け取るとダッシュで追いかけていきま
した。

「ルーちゃん、夏穂ちゃん……」

「「キヤロ……」」

私は2人にどういう顔で話せば良いか分かりませんでした。
私の不注意の所為で……

「大丈夫、エリオがなんとかしてくれる。」

ルーちゃんはそう言って私を抱きしめました。

「ルー……ちゃん？」

「だから泣かなくても大丈夫だよ。」

えっ!！?

私、泣いてなんか……

「あれ……？」

おかしいな、涙が止まらないよ……

「もう、まだ負けてないのに何泣いてるのよ、涙拭いてエリオの事
応援しよう！」

夏穂ちゃん……

そうだ、まだ負けてないんだ。

私は目を拭って、

「エリオ君がんばれー！！」

応援しました。

エリオSIDE

（まずいな、結構速い。）

徐々に追いついてきてると思う。
だけど、どうしても抜けない。

カーブも中間に差し掛かり、もうゴールも目と鼻の先。

（ダメだ、諦めないぞ・・・僕を信じてアンカーにしてくれたんだ・・・諦めてたまるか。）

僕はそう決意して更に力を込める。

そんな時・・・

「エリオ君がんばれー！！」

少し涙声の声が聞こえてきた。

（今の僕は杉山君なんだけど・・・）

声の主はキャラだろうな・・・

キャラは結構抜けてる所があるから・・・

恐らくライさんに似たのだと思う。

（だけど、リラックス出来た・・・）

前にレイ兄に言われたことがある。

『何事も力の入れすぎは逆にマイナスになる。どんな状況でも冷静でいることが一番大事なんだ。』

（そうだ、冷静にだ・・・）

力は抜かない。

「エリオ君!!」

私は駆け出しました。

エリオ君は間に合わないと思ったのか、ヘッドスライディングでゴールしました。

ほぼ同着。

でもそんなことよりも、私はエリオ君の事が気になりました。

「エリオ、大丈夫か!？」

エローシユ君が肩を貸して、エリオ君を抱えあげます。

「結果は？」

「まだ分からない。しかしヘッドスライディングするとはな……
本当に凄い奴だよ……」

「えへへ……」

苦笑しているエリオ君をエローシユ君は中に運んで来ました。

肘とか膝には複数の擦り傷などがあります。

「エリオ君……」

「キャラ、流石に大声で名前を呼んじゃダメじゃないか。」

あっ!?

そういえば……

それってとてもマズイのでは……?

「大丈夫だ、それくらい誤魔化せるさ。」

なら安心です……

ってそんな事じゃなくて……

「ごめんなさい!!私のせいで……」

私はこの場にいる2人に謝りました。

「せつかくみんなが繋いでくれたバトンを……私は……」

「キャラちゃん……」

頭を下げている私にエローシュ君が近づいて……

「ほっ!」

頭にチョップをされました。

地味に痛い……

「何するんですか……」

私は頭を抱えて文句を言いました。

「キャラちゃん、人には絶対何て無いんだ。誰だってミスはする。だからそんなに気にする必要なんてないんだよ。」

「ですけど……」

「キャラ、エローシユの言うとおりだよ。僕だってミスはするぞ。一生懸命やったキャラを責めないよ。」

「エリオ君……」

「キャラちゃんは頑張った……」

「佐助君。」

いつの間にか近くに来ていた佐助君にも言われる。

「それにね……」

そう言っつてエリオ君は本部があるテントを見ました。

「負けると決まった訳じゃないよ。」

『ただいまの判定の結果……1位、1組!』

その瞬間、私達のクラスから歓声が湧きました。

「ね、キャラ。」

「そう……ですね……」

その後、クラスに戻った私達はもみくちゃにされながら暖かい祝福を受けました……

零治SIDE

「エリオ。」

俺は救護室に来ていた。

エリオに話したかった事もあるし、エリオの怪我に真っ青になったフェイトの様子も気になったからだ。

キャラ達は今、閉会式を行なっている。

「あつ、レイ兄!!」

どうやらエリオは元気そうだ。

「こらエリオ、まだ動いちゃダメだよ!!」

「あつ、ごめんなさい……」

「おい、擦り傷くらい大丈夫だろ……」

「ダメだよ!!変なバイキン入ったらどうするの!?!」

フェイトは将来絶対に子煩悩だな。

下手をしたらモンスターペアレント何かもありえるかも……

「それくらい大丈夫だって。それよりエリオと話があるんだけど……」

「僕と……ですか?」

「ああ、だからちょっと借りるな。」

そう言ってフェイトからさっさとエリオを連れていく。

「ちょっと、まだ駄目だ……っていない?」

「……ならいいだろう。」

俺は校舎脇にレアスキルでジャンプしてエリオと離れた。

この話はまだフェイトに聞かせていい話じゃないしな。

「で、話ってなんですか？」

「エリオ、キャラのクラスメイトはどうだった？今日一緒にいてみてどう思った？」

「……みんないい人でした。親切で、面白くて……」

「そうか……エリオ、お前学校通う気はないのか？」

「……ごめんなさい、僕は……」

「恩返しのために管理局にか？」

「!!何でそれを!？」

「俺の推測。フェイトに断られたと聞いて、そうじゃないかと思っただんだ。」

「というのは建前で、わずかな原作知識でそうなんじゃないかと思っただけなんだけど……」

「僕は……助けてくれたフェイトさんに恩返しをしたい!少しでも早く……」

その気持ちは痛いほど分かるんだけど……

「お前はそれでいいのか?今日皆と一緒にいて、勉強したり、みんなと遊んだりしたいと思わないのか?」

「……………思いました。けど……………」

「なら学校に行くべきだ。」

「えっ!?!」

「恩返しなんて、いつでも出来る。ただな、小学生でいられるのは今しかないんだ。」

「で、でも……………」

「魔法の訓練なら俺や星達が教えてやれるし、なのは達だって学校に行きながら管理局に務めてるんだ。問題ないだろ?」

「そ、そうですね……………それだとフェイトさんに迷惑が……………」

「お前な……………今更迷惑だなんて考えるな。人はな、必ず助け合ってるんだ。1人で出来ることなんてたかがしれてる。俺だって、フェイトだって。だからな……………」

そう言っつて俺はエリオの頭を撫でた。

「一杯迷惑をかけてやれ。それで大きくなったらそれ以上にフェイトを助けてやるんだ!!ギブアンドテイク。悪くないだろう?」

「……………はい!」

どうやら分かってくれたみたいだな。

「それじゃあ早速フェイトに話してみるか。アイツ、絶対に喜ぶぞ。」

「そうでしょうか・・・？」

「もしそうじゃなかったら俺のモンバスの超レア素材タダでやるよ。」

「本当ですか!？」

「ああ、本当だ。」

この後、俺達はフェイトを見つけ、今の話をした。

フェイトは簡単に了承。

リンディさんにもその場に連絡して、OKを貰った。

保護施設やら何やらの手続きの影響で、実際に学校に来られるようになるのは来週からになるみたいだけど、エリオは終始笑顔だった。

零治 SIDE END

第7話 運動会です！（後編）（後書き）

エリオ君、次から1組に編入させたいと思います。

それと、エリオ君の目的が原作と違うかもしれませんが、もし、駄目だったら指摘してもらえるとありがたいです。

しかし今回はかなり苦労しました……

アイデアはありましたし、別に忙しかった訳でも無いのですが、何故か中々進みませんでした……

スランプ……ですかね？

まあスランプは実力のある人の言葉なんですけど……

取り敢えず、本編の体育祭を終わらせて、エリオ君の活躍を書きたいと思います。

これからもよろしく願います。

第8話 エリオ君が学校に転校してきました！なのにルーちゃんが不機嫌で怖い

こんにちはblueoceanです。

遅くなつてすいません。

こっちも風邪の影響で遅くなつてしまいました。

なるべく早く前のペースに戻せるようにしますので、これからよろしく願います。

第8話 エリオ君が学校に転校してきました！なのにルーちゃんが不機嫌で怖い

運動会から1週間が経ちました。

あの後からの学校は至って平和でした。

ただ、昨日行った中学の体育祭はとても面白かったです。

お兄ちゃんが犬さんになったり、ライお姉ちゃんが猫さんになったりしてとても盛り上がっていました。

こっちに来てから楽しい事ばかりです。

「今日は転校生を紹介するわね。」

朝の会、細野先生が言いました。

みんなの目がキラキラしています。

前みたいに佐助くんの隠しカメラは細野先生の手により、完全に撤去されており、クラスの人は誰が転校するか分かってません。

知っているのは私とルーちゃんだけです。

「先生、MAN? WOMAN?」

「何でわざわざ英語で聞いてくるのか不思議だけど、男の子よ。」

エローシュ君はそう聞くと、チツと舌打ちをして静かになりました。

キラキラ目を光らせていた男子の目が一気に冷めています。

「あなたたちは……その反応は流石に彼に響くわよ……彼はあなたたちと会うのを楽しみにしてたんだから。」

「彼？俺達の知ってる奴か？」

「そうよ、あれだけ彼に手伝ってもらったのに忘れちゃうの？」

それを聞いて、エローシュ君は誰が転校するのか分かったみたい。

他のクラスメイトも、もしかしてとヒソヒソ話し始めた。

「それじゃあ入っていいわよ。」

先生がそう言うのと扉が開き、ランドセルを背負ったエリオ君が入ってくる。

「みんな久しぶり……」

「……………エリオ君！！」「……………」

クラスみんなが驚いた声をあげました。

「こら！朝の会なんだから静かになさい！！それじゃあ、みんな知ってると思うけど、自己紹介お願いね。」

「はい、エリオ・モンディアルです！みんな、これからよろしくお願ひします！！」

そう言つてエリオ君は深々と頭を下げました。

「モンデヤ……ぐふっ!？」

「変態!！」

夏穂ちゃんの投げた筆箱がエローシュ君の頭を直撃。

つていつか夏穂ちゃん、筆箱は流石に投げちゃ駄目ですよ……

「……俺、いつか夏穂に殺されるのでは無いのだろうか?」

「……今更そんなことに気づくエローシュに敬意を称する。」

「よせや、照れるやないか。」

エローシュ君、佐助君は誉めてないです。

「それじゃあ恒例の質問タイムといきましょう。」

先生がそう言つとクラスメイト（特に女子）が一斉に手を上げました。

「それじゃあ……木原さん。」

「はい!あの……ちよつと待った!！」

木原さんが何か質問しようとした時、エローシュ君が割って入りました。

「ハア・・・もういい加減静かにしてほしいんだけど・・・」

「くっ、冷たい・・・だが、これは聞かなくてはならない!」

そう言って一旦言葉を切り・・・

「あの金髪お姉さんの胸のサイズは・・・げフツ!？」

そう聞く前にエローシュ君の所に行った夏穂ちゃんのグーパンが脇腹に直撃しました。

エローシュ君が悶絶しています・・・

「あの・・・大丈夫なんですか？」

「ああ、あれがいつも通りだから気にしないで。」

「はぁ・・・」

その気持ち分かりますよ、エリオ君。

そんな感じで、エローシュ君の所為で自己紹介は締まらず終わりました。

「学校って面白いね。」

ただいま昼休みです。

いつもの様に円を作ってお弁当を食べています。

ただ、そこにはエリオ君も混ざっています。

「変なクラスだけど、馴染んでくれて助かるわ。」

夏穂ちゃんは苦笑いしながら言います。

「だけど凄い人気だね・・・」

「確かにそうですね・・・」

真白ちゃんがそう言って校舎の方を見ました。

校舎の方にはエリオ君を見に来た別のクラスの女の子が物陰から覗いています。

「このリア充・・・」

「えっ！？なんでルー怒ってるの？」

ルーちゃんは今日はずっと不機嫌です。

エリオ君に話しかけようとして、何度も取り巻きの女の子に邪魔さ

れたのが原因だと思います。

「フン。」

ルーちゃんはそっぽを向いて、エローシュ君の弁当からおかずを取って食べました。

「あの……ルー様？何故にわたくしめのオカズを食べているのでしょうか……？」

「うるさい、エローシュは黙ってお弁当差し出せばいい。」

「ノオオオオオオオ！！！」

エローシュ君、八つ当たりされてます……

こういふときは……

「ドントマインド。」

「キャラちゃんその言葉好きだね!？」

何かカッコいいと思います。

エリオSIDE

初めての学校、結構緊張して登校したんだけどな……

「モンデヤ……ぐふっ!？」

エローシユが筆箱投げられてた……

その後もエローシユ君は冷たい目で見られてたり、筆箱投げた女の子にパンチされたりと散々な扱いだった。

「あの……大丈夫なんですか？」

「ああ、あれがいつも通りだから気にしないで。」

「はあ……」

先生にそう言われて、僕は空返事を返す事しか出来なかった。

「ねえ、エリオ君ってどこから引越して来たの？」

「好きな食べ物何？好きなアニメとかある？」

「何かスポーツとかやってる？」

ただいま休み時間何ですが、女の子から質問攻めにあっています。

「「「ねえねえ……」「」」

もう勘弁してほしいなあ……

僕は助けを求めるように回りを見た。

するとルーがこっちの様子を見ていた。

「ルー助け……」

助けを求めようとしたらそっぽを向かれた。

僕、何かしたっけ……？

それからずっとルーの機嫌は悪いままだった……

エリオSIDE END

「はいそれでは帰りの会を終わります。皆さん気を付けて帰ってください。」

エリオ君が転校してきて慌ただしかった学校も終わりです。

エリオ君人気は相変わらず高く、未だにエリオ君に声をかけようと廊下に待ち構えてる位です。

「リア充は死ねばいいんだ……」

「ちょっと、ルーちゃん!？」

ルーちゃんも終始不機嫌でした、まあ八つ当たりは全部エローシユ君だったので、問題無かったです……

「ルーちゃん、今日ちょっとおかしいよ、エリオ君にも冷たいし……」

「……そんなことない。」

「ルーちゃん……」

その後もルーちゃんはずっと不機嫌そうでした……
どうしたらいいのかな……?

「仕方ないな……」

「エローシユ?」

ルースサイド

今日はエリオが転校してくる日。

結構楽しみにしてた……

夏になって初めて出来たキャロ以外の友達で、初めての男の子の友達。

優しくて気が利くとても良い子だ。

別荘の時もとても楽しかったし、次に会える日もとても楽しみだった。

なのに……

「ねえ、エリオ君ってどこから引っ越してきたの？」

エリオは終始女の子に声をかけられていた。

それを見て、困ってる様子にも見えただけど、満更でもなさそう。

……女好き。

「ルーちゃん、今日ちょっとおかしいよ、エリオ君にも冷たいし……」

それは……
でも……

「・・・・・・・・そんなことない。」

「ルーちゃん・・・・・・・・」

そんな目で見ないで欲しい。

私だって普通でいたいんだけど・・・・・・・・
何故かエリオを見てるとイライラする。

「ちよつといいか？」

そんな時、アホエローシユが私達に話しかけてきた。

「何？今エローシユの相手をする暇が無・・・・・・・・」

そこまで言いかけて、私は黙った。

エローシユが普段見せない真面目な顔だったからだ。

「キャロちゃん、ちよつとルーちゃんを借りるな。」

「えっ！？エローシユ君！？」

「悪いけど待ってて。」

私はルーにそう言ってエローシユについて行った。

「この辺りで良いか。」

エローシユに連れられてきたのは、音楽室などがある校舎の方の階段。

確かにここなら滅多に人が来ない。

「で、話って何？」

「ルーちゃんが何でそんなにエリオを見てイライラするのか教えてあげようか？」

「なっ！？別に私はイライラなんて・・・」

「何だ？気づいてると思ったけど、気づいてなかったのか？」

「私は別にエリオが原因ってわけじゃ！！」

「取り敢えず、俺から一つだけ忠告しとくぞ。」

エローシユは私の意見など聞く耳を持たず、話を続けた。

「エリオはモテるぞ・・・今のままだったらエリオはルーちゃんからドンドン離れていくだろうな・・・」

「そんな事！！」

「おっと。」

殴りかかったが、エローシユに簡単に止められてしまった。

「何だ、怒るところからすると、やっぱりエリオの事が・・・」

「違う！！ただエリオは大事な友達で・・・」

回想・・・・・・・・

別荘の海でエリオと2人で遊んでいた時の話だ。
私達は砂でお城を作っていた。

「ルー、これ見てみなよ！」

エリオが見せてきたのは貝殻だった。

「これは？」

「そこで綺麗な貝殻見つけちゃった。」

「本当だ・・・・・・・・」

エリオが見せてくれた貝殻は虹色にキラキラ光ってて、とても綺麗だった。

「・・・・・・・・ちょっと待ってて。」

私が見殻をじいつと見ていたのを見て、そう言った。そして、エリオは走って別荘の方へ向かっていった。

一体どうしたのだろうか……

20分後……

「ルー!!」

「遅い……」

私は既にお城を作り終わっていて、ぼーっと海を見ていた。

「ごめんってお城凄!」

「ありがとう。」

「ってそうじゃない、ルー!」

少し強めに名前を呼ばれて私は強ばった。

私、何か怒られる事したっけ……?

「はい!」

そんな不安をよそにエリオは私に何かをくれました。

「これって!」?

「そう、ちっきの貝殻。」

渡されたのはさっきの貝殻。

だけど、貝殻には長い紐が付いていて首にかけられるようになっていた。

「ルーにプレゼント。」

「私に……?」

「うん。はやくさんに作って貰ったんだ。しかも『壊れないようにコーティングもしていたる!』って気合入っちゃって……ちよつと時間経っちゃった……」

私はそんな話なんて耳に入らず、ずっと貝殻を見ていた。さつきよりも光つてとても綺麗だからだ。

「……ねえルー。」

「えっ?何?」

「付けてみてよ。」

「えっ!?!うん……」

ちよつと恥ずかしい思いはあつたけど、言われたとおり付けてみた。

「……びびっ」

「似合ってる、可愛いよ。」

「ルーちゃん、どうしたの？顔が赤いけど……」

「な、なんでもない!」

私ったら何であの時の事を……

「ともかく、俺が言いたい事は、そんな冷たい態度ばかりとってると、エリオはお前からドンドン離れていくぞ。」

離れていく……

「それは嫌だ……」

女の子にヘラヘラしてるエリオも嫌だけど、私から離れていくのはもっと嫌だ……

「そうか、なら謝るんだな。今日の態度じゃエリオは嫌われてると思ってるぞ。」

そつだ、先ずは謝ろう。

全てはそこからだ。

「分かった、そうする。ありがとうエロージュ。」

「どういたしまして。俺もこれで弁当の被害も収まるし、大助かりだ。」

「それは無い。」

「少しは自重してくれよ!!」

その後2人で笑い合った。

今度、また何か相談事があったらエローシュに相談しよう。

「キャラロ、ごめん!」

「あつ、ルーちゃんおかえり!」

私が教室に戻つてくると、机に座って本を読んでいるキャラロがいた。

そして……

「ルー。」

エリオもいた。

「エ、エリオ……」

何してるんだ私……

エリオに謝らなくちゃいけないのに……

「あのね……」

「……………エリオ君!!」「……………」

そんな時、廊下からエリオを呼ぶ女子たちがやって来た。

「な、何……?」

「……………一緒に帰りましょ!」「……………」

「で、でも僕は……」

「キャラ、エリオを置いて帰ろう。エリオは女の子の相手忙しいみたいだから。」

「えっ!?でも……」

「いいから行きましょ。」

そう言っつて私はキャラを無理やり引っ張っていった。

「ちょ!?ま、待って2人共々!!」

「じゃあまた明日ね。」

私はそう言っつて、エリオを置いて教室を出た。

「いいのかな……?」

「良いんじゃない。リア充なんてほっとけば。」

「でも困ってるよ。」

そう言われてエリオを見てみると、エリオが助けを求める小動物みたいで少し可愛かった……

「まあ大丈夫でしょ。それより今日、キャロの家に行っていない？」

「うん、いいよー！」

こうして私達はエリオを置いて帰った……

ル I S I D E E N D

第8話 エリオ君が学校に転校してきました！なのにルーちゃんが不機嫌で怖い

ちょっと恋愛っぽくしてみました。

次もエリオを中心とした話でいきたいと思います。

次もよろしくお願いします。

第9話 秘密基地って男の子のロマンなのですか？（前書き）

こんにちはblueoceanです。

今回はエリオ視点。

視点がちよこちよこ変わるのので読みずらいかもしれませんが。

第9話 秘密基地って男の子のロマンなのですか？

「で、どこに連れていくの？」

「……行けば分かる。」

授業が終わった放課後、佐助に呼ばれ、一緒にある場所に移動中な
んだけど……

「キャロやルー達も連れてきても良かったんじゃないの？」

「駄目、特にルーちゃんは危険……」

何で駄目なんだろう……

僕的にはこれを利用してルーと仲直り出来ればって思ったんだけど・
・

「……着いた。」

こうして連れてこられたのは体育館の前。

ここに何かあるのかな？

取り敢えず僕達は中に入っていった。

キャロSIDE

「怪しい……」

私は今、ルーちゃんと一緒にエリオ君と佐助君を追跡しています。
佐助君は人を見つけるのがうまいので、なるべく離れてなので結構
骨が折れます。

「でもこういって刑事みたいで楽しいね。」

「……確かに。」

前に夜美お姉ちゃんと見た一匹狼刑事がまた見たいです。

一人では無いですけど……

「どうやら体育館に向かっている見たい……」

「体育館ですか？」

体育館に何かありましたっけ……？

「キャロ、行くよ!」

「あつ、待ってルーちゃん!」

取り敢えず私達は彼らを見失わないように後を着けました……

キャロSIDE END

「ねえ、ここで何をするの?」

連れてこられたのは体育館の裏。

一体こんな所で何をするんだろう?」

「……黙ってる。」

そう言って佐助君はキョロキョロと回りを確認し始めた。

警戒してる?」

「……よし、ついてきて。」

そう言って、ステージ裏にあった階段で下に降りていく。

こういう所って入っちゃ駄目なんじゃないのかな?」

「エリオ、早く。」

急がされたので、取り敢えず僕は佐助の後に続いた。

キョロSIDE

「あれ?」

体育館に入っていたのを確認して、体育館の中を覗いてみると、既に二人の姿はありませんでした。

「どこにいったのかしら……」

「確かに入っていったんですけどね……」

本当に何処へ行ったのでしょうか？

「取り敢えず探してみましよう。」

「うん！」

私達は倉庫から順番に見ていくことにしました……

キャロSIDED END

階段を降りてみるとステージ裏にきました。

下はポールなど、運動会で使っていた物もあり、埃っぽく、結構物が置いてあるため移動しづらい……

「足元気を付けて……」

「うん……」

言われる前から気を付けているけど、本当に歩きづらい……

ともかく、僕達は進みました。

しばらくすると、物が高くまで積んである場所で止まりました。

「どうしたの？」

「着いた。」

着いたって……

ここに連れてくるために呼んだの？

「ちょっと待って。」

そう言って、佐助君は物の横に行き、力一杯押し始めた。

「こんなに高く積んであるのに一人じゃ動かないんじゃない……」

そう言った矢先、物は簡単に左にずれ、空いたスペースに1つのドアが現れた。

「……」

そう言って佐助は中に入っていった。

「あつ、待って!？」

僕も急いで佐助を追った……

キヤロSIDE

「埃っぽい・・・」

「何でこんなところに・・・」

体育館の倉庫を探していた私達でしたが、どこにも人の気配は無かったので、ステージまでやってきました。

そして、見つからない場所を考えると、下に行ったのではないかという結論に至り、こうしてステージの下へ来たのですが・・・

「イタ！？・・・もう邪魔・・・燃やす？」

ルーちゃんは足を抑えて物騒な事を呟きました。

「ルーちゃん！！そんな事したら体育館全て燃えちゃうから!？」

「ちっ・・・」

舌打ちしましたが、冗談ですよね？

そんな時・・・

「あれ？あそこだけ、高くまで物が積まれてる・・・」

私は他の場所とは違う、高く物が積まれている場所を見つけました。

「それなのに、何でこんな所にこんな部屋があるかって事か？」

僕は激しく頷いた。

真ん中に先生達の会議室によくある横長の机が2列並んでいて、それを囲む様にパイプ椅子が並んでいる。一番奥にはテレビとゲーム機が置いてある。

部屋の横脇には長い棚があり、そこには漫画やゲームソフトなど、様々な物が置いてあった。

「まあ驚くのも無理ないか……俺達もここを作るのに結構時間がかかったからな。」

「テレビやゲームをここに運び込むのに苦労した……」

「机やイスは体育館の物を失敬した。一杯あるし、行事でもない限り、こつちに来たりしないからな。」

「流石にやっていいことと悪いことはあると思うんだけど……」

「いいじゃないか！秘密基地は男のロマンだぜ！……」

「そつだ……」

まあ僕もそついうのに憧れたりするけど……

「それに、ここは俺達しか知らない……」

「えっ、そつなの！？」

「エリオ、その意味分かるか？」

2人だけなのに、僕に教えてくれた……

ってことは……

「僕を秘密を明かしても信頼出来るって評価をもらえたってこと？」

「何だ、その遠まわしな言い方……要するに『親友』だから
ってことさ!!」

「親友……」

「そう、俺も佐助もお前にだったらこの秘密を教えて上げてもら
いって思ったんだ。」

佐助もこくこくと頷いている。

「2人共……」

僕は嬉しかった……

今はキャラオヤルーみたいな友達はある。親友だって思ってる。

だけど、面と向かって言われたのは初めてだ……

「おいおい……」

「エリオ……」

「あれ？僕……」

泣いている……？

「何だ？前の学校では友達いなかったのか？」

「エローシユ、直接過ぎ……」

「いや、いいんだ。僕にとっての友達はキャロとルーしかいなかったから……」

僕は涙を拭きながらそう言った。

「ありがとう2人共、僕、本当に嬉しいよ！」

この学校に転校してきて本当に良かった。

今度、レイ兄にもお礼を言わなきゃ……

「それじゃあ、親友になった証として、エリオにもお宝本を教えな
いとな……」

「お宝本？」

「エリオもエロ紳士同盟の仲間入り……」

「エロ紳士同盟？」

何だろう？

関わるなって体が警鐘を鳴らしてる気がする……

そんな時……

「それは駄目（です）ー！！」

二人の女の子が部屋の中へ入ってきた。

キャロSIDE

「取り敢えず、中の様子を探ってみましょう。」

静かにドアノブを動かし、少し覗ける位まで開けるルーちゃん。

こうなると私の探偵心にも火が付いてきます！！

「任せて！私、一言も聞き漏らさないように聞いているから！！」

「キャロ、うるさい！！」

………じめんなさい。

『ようこそ、俺達の秘密基地へ！！』

エローシュ君の声が聞こえます。

ここは秘密基地だったのですか……

『って、ここはどっか？』

流石のエリオ君も動揺しているようです。

『どっって、俺達の秘密基地だけ……』

そういうことを聞きたかったのではないと思うのですが……

『いや、そういうことじゃなくて、さっきまでステージ下を歩いていた筈なんだけど……』

『それなのに何でこんな部屋があるってことか？』

エリオ君の口調からして、どうやらとても信じられないような光景を見ているのだと思います。

『まあ驚くのも無理ないか……俺達もここを作るのに結構時間かかったからな……』

『テレビやゲームをここに運び込むのに苦労した……』

テレビやゲームもあるのですか！？

『机と椅子は体育館の物を失敬した。一杯あるし、行事でもない限り、こっちに来たりしないからな。』

『流石にやっついていいことと悪いことがあると思うんだけど……』

私もそう思います。

『いいじゃないか！秘密基地も男のロマンだぜ！！』

『そうだ……』

え〜！？お兄ちゃんを見てもそうは思えませんが……

『それに、ここは俺達しか知らない……』

えっ！？ってことは夏穂ちゃんも知らない？

『えっ！？そうなの？』

『エリオ、その意味分かるか？』

その意味？

『僕を秘密を明かしても信頼出来るって評価をもらえたってこと？』

『何だ、その遠まわしな言い方……要するに『親友』だから
ってことさ！！』

『親友……』

『そう、俺も佐助もお前にだったらこの秘密を教える上げてもいい
って思ったんだ。』

『2人共……』

2人共って事は、佐助君は頷いたのですかね？

「いいですね、ごういづの……」

「うん……」

私はお兄ちゃんからエリオ君の事を聞いています。

それを聞いても私は何も思いませんでしたけど、エリオ君はずっと悩んでいたらしいです。

それをエリオ君に言ったら泣きながらありがとうと言ってくれました。

恐らくその時と同じ気持ちなんでしょう……

「ルーちゃん、帰りませんか？ここにいたら3人に悪いです。」

「……そうだね、今回は帰ろうか。」

私達はそつと帰ろうとしたその矢先でした。

『それじゃあ、親友になった証として、エリオにもお宝本を教えな
いとな……』

『お宝本？』

何だか嫌な予感がします。

ルーちゃんを見ると、どうやら同じ事を思ったらしいです。

『これでエリオもエロ紳士同盟の仲間入り……』

これは不味いです！
エリオ君が駄目な道へと進んでしまう！！

「ルーちゃん！」
「キャラロ！」

私達はアイコンタクトで次にどんな行動に移れば良いか判断して、動きました。

「それは駄目（です）ー！！！」

キャラロSIDE END

「全く、油断もスキも無い……」

いきなり現れたキャラロとルー。

キャラロはともかく、ルーは怒りながら「正座！！」と怒鳴って、エローシュと佐助の2人を床の上に正座させて、説教している。

「で、何で2人がここにいるの？」

そんな様子を見ながら、何故か置いてあったポットであったかいお茶を入れ、説教の様子を一緒に見ながら話していた。

「えへへ……どうしても気になって付いて来ちゃった。」

付いて来ちゃったって……よく佐助に気づかれなかったな。

「気づかれないように、結構離れて追跡してたの!!」
力説しながら言ってくるな……

「それでね!ここの場所も2人で知恵を絞って見つけ出したの!!」
こんなに熱くなりながら話すキャラも珍しいと思う。

「いい?この秘密基地は俺達のじゃなくて、私達みんなの物ね!!」
どうやら説教も終わりらしい。

「で、でもルー様、ここは俺と佐助が長い年月をかけて……」

「お宝本、夏穂に渡されたい?」

「「「こちらこそよろしくお願いします!!」」」

「ありがとう。あつ、それと明日には夏穂と雫にも教えとくから。」

「「えっ!?!」」

「それまでにお宝本もちゃんと違う場所に隠しときなさい。」
そう言われると2人は慌ただしく動き出した。

しかし大きなダンボールって……

一体何冊あるんだ？

「しかし……」

そんなことを思っていると、不意にキヤロが話しかけてきた。

「これからもっと楽しくなりそうですね。」

キヤロは満遍の笑みでそう言ってきた。

「そうだね。」

そのためにも早くルーと仲直りしなくちゃな……

帰り道……

「ね、ねえエリオ……」

ふと、ルーに声をかけられた。

場所はまだ学校。

キヤロはトイレに行っていて今は2人だけだ。

「な、何？」

「あ、あの……」

そう言って沈黙が過ぎる。

こつこつ時は男から話さないと……

「エリオ!」「ルー!」

「」「ごめんなさい!」「」

「「えっ!?!」「」

見事に被っちゃった……

「何でエリオが謝るの?」「」

「だって、ルーが怒ってるのは僕のせいでしょ?」「」

「ううん、確かにエリオも多少は悪いけど、悪いのはこつち。エリオは謝らなくていい。」

「そんなことは無いよ、僕だって悪いんだから謝る!」「」

「いい!」「」

「謝る!」「」

「いい!」「」

「謝る！！！」

そんなやり取りをして……

「アハハハハハハ！！！」

僕たちは笑い合った。

「あれ？2人共仲直り出来たのですか？」

少し2人で話していたら、キャラ口が帰ってきた。
僕達の様子を見て、仲直りしたと思ったみたいだ。

「うん。」

「もう大丈夫だよ。」

「よかつた〜これで3人仲良く帰れるね。」

そう言つてキャラ口は僕とルーの腕を掴み引つ張りながら歩きだした。

「帰るから引つ張らないで……」

「危ないよキャラ口。」

「大丈夫ですよ〜」

嬉しそうに言いながらキャラ口は歩く。

もしかして今回の事で、一番心配してくれたのはキャラかもな・・・

『エリオ君はエリオ君だよ！！誰かの代わりなんかじゃない！！』

あの時に言われた事は忘れない。

フェイトさん、レイ兄、ルー、キャラ。

この人達の出会いがあつてこそ、今の僕がいる。

「エリオ（君）？」

「あつ、ごめん・・・」

これからも3人で仲良くやっていこう。

そんなことを思いながら、僕たちは3人で仲良く帰った・・・

第9話 秘密基地って男の子のロマンなのですか？（後書き）

今回でた秘密基地ですが、テレビは見れません。

ゲームするために用意したものです。

エリオとルーも仲直りして、次はどうするかな……

取り敢えず次もよろしくお願いします。

第10話 初めての動物園（前書き）

こんにちはblueoceanです。

遅れて申し訳ない・・・

クリスマスは特に何も無くただバイトをしてました。
寿司屋でバイトしているのですが、何故一杯客が来た!？

おかげで疲れた・・・

今回は休日の話。

エローシユ達は最後にちよこつと出るだけです。

第10話 初めての動物園

「うわぁ……お鼻が長いです!」

こんにちは、有栖キャラオです。

今日は日曜日。

休日を利用して、動物園に来ています。

メンバーは有栖家、アルピーノ家、エリオ君です。

「これが象なんだ……」

「大きいね……」

一緒に見てるルーちゃんとエリオ君も驚いています。

確かに大きいですけど、私のいた里ではもっと大きい昆虫や、動物がいたので大きさはイマイチです。ただ……

「お鼻を使ってご飯を食べるんだ……」

器用にお鼻を使ったりんごを食べてました。

……なかなか可愛いではありませんか。

「3人共ー!次行くわよー!」

「……はい!」

メガー又さんに呼ばれて、私達は次の動物の場所へ移動しました。

「しかし、動物園なんて小学校以来だな・・・」

「そうですね、レイと一緒にいった以来ですね。」

「あの時はライが柵を登りそうになって苦労した・・・」

「ライも可愛いじゃないか。と言っても今も余り変わらなそうだが・・・」

「ぼ、僕そんな事してないよ！！それにフェアリア、それってどういう意味！？」

慌てて否定するライお姉ちゃんですが、フェアリアお姉ちゃんの言うことが分かります。

直ぐに想像できました・・・

「どうだ？エリオも楽しんでるか？」

「はい！ミッドにいない動物もいたので面白いです。」

「そりゃあよかった。」

「ゼストも楽しんでる？」

「ああ、楽しんでるよ。」

ルーちゃんの質問に大人な対応で流すゼストさん。

「隊長？そんなそっけない反応じゃルーが可哀想よ。」

「そっなのか？」

「…………お父さんつまらない。」

「俺はお父さんでは…………」

ルーちゃんが涙目でゼストさんを見つめます。

「うぐっ、だ、だがものには順序が…………」

「はあ…………案外ヘタレです、ゼスト。」

「ぐはあ!?!?」

ルーちゃん厳しいです…………

「…………レッサーパンダ!」「…………」

ああ、なんて可愛い動物なんでしょう……

私とルーちゃん、フェリアお姉ちゃんはすっかり虜になってます。

特にフェリアお姉ちゃんはいつものクールな印象は無く、ホワホワしています。

「3人共、次行く……」

「あつ、こつち見た！」

「私はここですよ！」

「か、か、可愛い……」

「聞いちゃいねえ……」

「私達が見てるからエリオ君達と先に行つてて。」

「すみません、お願いしますメガー又さん、ゼストさん。何かあったら携帯に。」

「了解した。しかし……あの時戦った戦闘機人とは思えない変わりようだな……」

「フェリアは可愛い動物を見るといつもあんなんです……」

零治SIDE

「うわあ、かつこいい・・・」

エリオは大きく背伸びをしているライオンを見て呟いた。

本当は荒々しく咆哮位して欲しいもんだが、ここは動物園。かなり大人しい。

「あの牙とか立派だな・・・」

それでもエリオは満足そうだ。

「レイ兄、ライオンって強いのか？」

「まあ肉食だし、サバンナの王様って所かな。」

「そうなんだ・・・ねえだったら管理世界にいる・・・」

「エリオ、地球にいる生き物は炎を吐いたり、電気を飛ばしたりする生き物はいないんだ。比べても仕方がないぞ。」

「そうなの？」

魔法に関わってなきゃ、エリオの方が変人って思われるぞ・・・
そう思うと地球の生き物って弱いなあ・・・

スパロボZみたいに世界が混合したらどうなるのやら・・・

つて動物だけじゃなく人間もまずそうだけど。

「ねえレイ兄、あつちの黒い点々があるの何？」

「あれはチーターだな。足がもの凄く速い動物だよ。」

「へえ、どのくらい？」

「地球上の生物の中で1、2を争う筈……」

「そうなんだ!!!」

手すりに跨り、食い入る様にチーターを見るエリオ。どうやらライオンよりも気に入ったみたいだ。

「何見てるの、エリオ君？」

そこにさっきまでレッサーパンダを見ていたキャロとルーがやって来た。

「チーターだよ!地球上の生物で1、2を争う速さなんだってさ!」

「へえ……でもヴォルテールの方がきつと速いです。」

竜と比べてどうする。

「それに、あの黒の点々がダサイ……」

ルーもキツイな……

「でも地球の中で1、2を争うんだよ！凄いやね!？」

「ですけど地球で、ですよ？管理世界を含めたら一体何番になるのでしょうか？」

「明らかに下位。」

もうエリオをいじめるの止める。

エリオが涙ぐんできたじゃないか……

仕方がない、助け舟を出すか……

「そんな事言っていないのかお前ら。チーターは虎の仲間だぞ、それは遠回しに虎を馬鹿にしないか？そうするとタオガースを馬鹿にしているのと同じ……」

「チーター最高(です)！」

それでよし。

「レイ〜！！次の場所へ行くよ〜！！！」

「次行ってくつてよ3人共。」

「……はい。」

ライに呼ばれ、俺達は移動した……

零治SIDE END

「ふむ、見事に色が変わってるな……」

「夜美お姉ちゃん？」

私達は爬虫類エリアに来ています。

暗い洞窟の中みたいになっていて、いくつかの窓から動物を見れるようになっています。

本当はみんなで入る予定でしたが、星お姉ちゃんは爬虫類が苦手らしく、ベンチで休んでるって一緒に来ていません。

そう言えば、中学校の体育祭の時、障害物走のウェンディお姉ちゃんが着ていた半魚人を見て、顔を青くしてたけど、爬虫類に何かトラウマがあるのかな？

……半魚人って爬虫類でしたっけ？

「キャラか、これを見てもみる。」

そう言われて私は夜美お姉ちゃんが見ていた窓を覗き込みました。

「トカゲですか？でもこのトカゲが何か……？」

「そのまま見てるんだぞ。」

そう言っつて夜美お姉ちゃんは窓をコツンとノックしました。

すると緑の色だったトカゲの色が派手になりました!!

「色が変わりました!!」

「カメレオンは興奮したり、体調が悪かったりすると色が変わるのだ。今は興奮してるから派手な色になっている。」

「夜美お姉ちゃん詳しいです!!」

「あ、ああそうだろう・・・（言えない、さっきカメレオンの説明を読んだなんて言えない・・・）」

何か夜美お姉ちゃんの反応が少しおかしいですけど、気のせいですよね？

「キャロ〜こっち来てみなよ〜!!」

「はい、今行きます!!夜美お姉ちゃんも行くっつ。」

「ああ、そうだな。」

私は夜美お姉ちゃんと手を繋いでライお姉ちゃんの所へ行きました。
・・・

「それじゃあここでお昼にするか。」

そう言ってお兄ちゃんはレジャーシートを敷きました。
それに並ぶようにゼストさんも敷きます。

「はい、皆さんのお皿です。」

星お姉ちゃんはみんなに紙のお皿を配ります。

「飲み物はこれだな。」

フェリアお姉ちゃんがみんなに紙コップを渡しています。

「それでは……どうぞ！」

そう言っつて星お姉ちゃんがだしたお弁当箱は大きく、4段重なったお弁当です。

- 1 段目においなりさんとおにぎり。
- 2 段目にはソーセージなどのお肉類のおかず。
- 3 段目には豆やサラダなどのおかず。
- 4 段目にはエビフライなど揚げ物が色々ありました。

凄い量ですし、いつも以上に豪華です！

「これ、全部星ちゃんが全部作ったの!？」

メガー又さんも驚いています。

「流石に私だけじゃ作り切れなかったのレイにも手伝ってもらいましたよ。」

「零治、お前料理も出来るのか!？」

「ええ、むしろ最初は星達にも俺が料理を作ってたんですよ。星が料理を覚えてあまり作らなくなりましたけど……」

そう聞いて驚いてるゼストさん。

「レイ兄の料理も美味しい。」

「そうだね、僕もそう思うよ。」

ルーちゃんはともかく、エリオ君も食べたことがあるみたいです。

「俺も料理を覚えようか……」

「そうしてくれると私も助かります。それに料理できる男の人はかっこ良いですよ。」

ゼストさんはクッキングパパになるそうです。

「だけどマズイのを食べさせないでね。」

「……努力する。」

ルーちゃんは本当に厳しいですね……

さて、昼食も食べ終わり、次は猿山に来ました。

「何か一番上にいる猿が偉そうですね……」

「ああ、あれはボス猿だろうな。」

「『ボス猿？』」

猿にも上下関係があるのですね……

「だけど、あの猿、餌を独り占めしてる……」

「懲らしめようか？」

「止めなさい。」

ルーちゃんが身を乗り出した所ですかさず星お姉ちゃんが止めました。

流石にそれはいけないと思います。

「だけどあのお山の大将みたいな奴を見るとイライラする。ならエローシユの方がマシ。」

「エローシユ、猿と比べられてる・・・。」

「ルーちゃんはエローシユ君に対しての評価が酷いです・・・。」

頑張れ、エローシユ君・・・

「さて、次に行くか。」

お兄ちゃんがそう言ったので私達も次へ向かいました。

そして、次のエリアに来た時でした。

「あれは何の集団だ？」

フェリアお姉ちゃんが指さした方向に多くの人が集まっていました。何か珍しい動物でもいるのかな？

「あそこは・・・パンダか。そう言えばテレビでパンダ来日ってニュースやってたっけ？」

「そうだな、確か最近の朝のニュースだったはずだ。」

お兄ちゃんの質問に夜美お姉ちゃんが答えました。

確か、私もその時見ていたと思います。

「私見てみたい。」

「私も！」

「僕も！」

「そうか……なら見てみるか！」

こうして、私達はパンダの檻へ向かいました。

ですが……

「見えない……………」

ルーちゃんの言う通り、多くの人でパンダが見えません…………

「俺やゼストさんの身長なら何とか見えるけど、他のみんなは厳しいか……………」

「僕はジャンプすればなんとか見えるよ！」

「私も何とか見えました……………」

「我は無理だな……………」

「私もだ……」

「くっ!!」「」

夜美お姉ちゃんとフェリアお姉ちゃんが自分達の傷を舐め合っように抱き合ってます。

「そうか……なら肩車でもするか？そうすれば見えるだろ？」

肩車!!

確かにそれなら私も見えます!!

「はい！お願いします!!」

「わあ……」

肩車をしてもらって見た風景は凄く高くて、なんだが新鮮です。

「ほら、パンダ見てみな。」

そう言われてパンダの檻を見えます。

パンダはあぐらをかいて、笹を食べていました。

可愛いです……

「次はルーか？」

「私はゼストにしてもらう。」

「ならエリオか。」

「はい、お願いします!」

うう、もう終わりですか……

名残惜しかったですが、私はお兄ちゃんに下ろされてしまいました。

「どうだ?」

「うわあ、可愛い……」

いいなあエリオ君……

「レイ、わ、我も……」

「夜美も見たいのか? そうだな……流石にその年で肩車は
恥ずかしいだろうからおんぶにするか?」

「あ、ああ! それでいい!」

夜美お姉ちゃんは嬉しそうに、エリオ君を降ろしたお兄ちゃんの背
中に乗りました。

その後、フェリアお姉ちゃんが背中に乗り、私と何往復かしてから
次に移動しました。

パンダ、恐ろしいです!!

あの後、順に動物園を回って行きました。

キリンにゴリラ、カバにワニ。

色々回り、既に夕方。

楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。

「お母さん、この亀のぬいぐるみとワニのぬいぐるみが欲しい。」

「どっちも大きいじゃない……どうやって持って帰るの……」

「ゼストが持つ。」

「俺はメガーンの車イスを動かすから無理だ。」

「宅配をお願いします。」

「だけど駄目です。部屋にも一杯あるじゃない。」

「新しいのも欲しい!」

ルーちゃんは粘ります。

よっぽど気に入ったのでしょうか……?

「エリオも何かあるか?ちゃんとフェイトからお金も預かってるし、

好きなのを買っていけ。後、ハラオウン家に何かお土産買っていつてあげな。」

「はい!!」

「あつ、私も行きます!」

私は走っていくエリオ君を追いかけてました。

「エリオ君は何を買うの?」

「先ずはお土産から。……………どれにしようかな……………」

洋菓子から和菓子と種類は色々、お土産はとても充実してました。

私も何にしようかな……………?

「……………あつ。」

キヨロキヨロと周りを見てみると、そこには可愛い動物の写真立てがありました。

「かわいいね。」

いつの間にか後ろにいたエリオ君が言いました。

「そうですね、私もそう思います。」

もうこれにしようかな……

他にも何種類か買えば複数の写真を入れられるし……

「よし、決めた！」

これにしよう!!

「そうだ、せっかく来たのだから写真取りましよう！」

お土産も買って、後は帰るだけという所でメガー又さんが提案しました。

「そうですね、せっかくだしそうしますか。」

「僕、カメラ買ってくるね！」

ライお姉ちゃんが売店に走っていきます。

「さて、写真を撮るならどこにする？」

「私、パンダが良い。」

「僕も！」

「私もパンダが良いです！」

「そうか、ならライが来たらパンダの所へ行くか。」

私達はパンダの所で写真を撮る事にしました。

「はい、皆さん撮りますよ……はい、チーズ！」

「へえ、これがその動物園に行った時の写真？」

「はい！とても楽しかったです！！！」

あの日から暫くして、写真が出来たので学校に持ってきました。
今、夏穂ちゃんと真白ちゃんに見せています。

「いいな・・・私パンダ直接見たことが無い。」

「私も無いわ。ねえ、大きかった？」

「はい、大きかったし、可愛かったです！」

「そうなんだ！・・・それにしても・・・」

そう言っつて写真をじいっと見る夏穂ちゃん。
どうしたのでしょうか？

「ここにいる4人がキャロのお姉さん？」

「はい、そうですけど？」

「美人・・・」

「運動会の際はチラッと見ただけだったから良く分からなかったけど、凄いわね・・・羨ましいわ・・・」

「確かに・・・エリオのお姉ちゃんに負けない・・・いや、それ以上のダイナマイトボディ・・・」

「これは凶器・・・」

「・・・アンタたちいつの間にかいたの？」

いつの間にかいたエローシユ君と佐助君が写真をのぞき込んでいました。

「いいなあ、お姉ちゃんに『今日は体の隅々まで洗ってあげる』とか言われて一緒にお風呂入ったり、『一緒に寝よう』って言われてあの豊満な胸に抱きついて……」

「そんなわけあるか！」

すかさず夏穂ちゃんがチヨップをいれます。

「痛っ!?!? たく冗談だつて……」

「アンタが言うつと冗談に聞こえないのよ！」

「だけど羨ましいシチュエーション……」

「アンタもか！」

佐助君にもチヨップを入れる夏穂ちゃん。

……ツッコミが冴えてますね。

「そつだ、エローシユ君達は休日は何をしていたのですか？」

それを聞いた瞬間、4人は一気に押し黙りました。

あれ、聞いちゃいけなかった？

「……この際、キャ口達も巻き込んでやらない？」

「いい案だ夏穂。俺もちょうどそう思ってた。」

「ならエリオ君とルーちゃんも呼ばないですね。」
「それは俺に任せろ……………」

何やら4人がコソコソ話始めました……………
一体何の話でしょうか？

「キヤロ、今日の放課後、秘密基地に集合な。エリオとルーちゃんも呼んでおくから。」

「はあ……………」

一体何をするのでしょうか……………

第10話 初めての動物園（後書き）

カメレオンって周囲の環境に合わせて同じ色になれないらしいです。
（WIKI調べ）

個体種によって変化する色は決まっているらしく、ちょっとガツカリ……

興奮すると派手な色になるらしいのですが、派手な色になるとしか書かれていなかったため、派手な色としました。

皆さんのご想像にお任せします……

今回はエローシュ達が休日に行っていた事を放課後、秘密基地でやります。

またもやたぬき印の商品。

お楽しみに〜

みなさん良い一日を。

第11話 ボードゲームの筈ですけど何かが違う……（前書き）

こんにちはblueoceanです。

前回の続き、エローシュ達4人がやっていた休日の遊びです。

どうしてこうなった……？

第11話 ボードゲームの筈ですけど何かが違う……

あの後エローシユ君達に言われて、エリオ君とルーちゃんと合流した私は、秘密基地へと向かいました。

秘密基地についてはちゃんと夏穂ちゃんと真白ちゃんに教えました。その時、エローシユ君と佐助君は夏穂ちゃんにボコボコされてましたけど……

「一体何するのかしら……」

「でも僕、結構楽しみなんだよな……」

エリオ君は楽しみたいです。

けど私は、4人の様子を見る限り何か嫌な予感がするんですけど

……

「来たな3人共……」

部屋に入ってみるとエローシユ君を含めた4人が机を囲んで座っていました。

その雰囲気は何故か重いです……

「取り敢えず座ってくれ」

そう言われて空いている席に座ります。

一番奥がエローシユ君。時計回りで夏穂ちゃん、私、佐助君、ルーちゃん、エリオ君、夏穂ちゃんという順番です。

「それじゃあ始めるか……」

そう言つてエローシユ君は後ろから何か大きな箱を取り出しました。それを机の上に置きます。

「これは……？」

大きな箱でボードゲームの様な物です。

横には可愛いたぬきのデザインがあります。

「これはカードを使った、ちょっとしたボードゲームだ……」

イマイチ分かってない顔をしていた私とエリオ君、ルーちゃんにエローシユ君が続けて説明してくれました。

「ルールは普通にコマを進めて、マスの通りにしていく。15ターン目に借金の人は罰ゲームって内容だな。他、細かいルールはその時に教えるから」

「それはどういふ……」

「まずは俺からで時計回りに回していこう」

エローシユ君に邪魔され、ルーちゃんは不機嫌。

でもそんな様子を見た夏穂ちゃんがツツコミません。

何か今日おかしいです……

「それじゃあ始めようか……」

何ともおかしい雰囲気で、人生ゲームがスタートしました……

「それじゃあ先ずは俺がルーレットを回すな」

そうやってエローシユ君はルーレットを回します。

出た目は………4です。

「おっ、カードマスか、ラッキー」

そうやって山になっているカードから一枚引きました。

「カードマスって？」

「ああ、今説明する。このゲームにはカードマスがあつて、それぞれ罫、イベント、アイテムがあるんだ。罫は主に他プレイヤーの妨害、イベントは必ずやらなくてはいけない命令事があるんだ。アイテムは言葉通りだな」

罫ですか………

でも私は見ました。

『イベント』の言葉が出たとき、真白ちゃんの顔が青くなったのを

………

「今回俺の引いたカードはイベントじゃない。まあ罫かアイテムかは教えないけどな。次はキャロちゃんだな」

「あつ、はい。では……………」

私はルーレットを回しました。

「えっと……………3ですね」

私は自分の駒を3マス進めます。

「つまり、川に財布を落とす。所持金の半分を失う……………うつつ、ついてないです」

私も所持金は最初なので皆同じの500万。
なので半分の250万になってしまいました……………

「次は私ね」

今度は夏穂ちゃんがルーレットを回します。

「私も4ね」

夏穂ちゃんは自分の駒を4マス進めます。

「私のカードは……………イベントでは無いわ」

どうやら夏穂ちゃんの引いたカードは罫かアイテムみたいです。

「次は僕……」

今度は佐助君です。

「僕は6だ……」

そう言つて佐助君は自分の駒を進めます。

さて、6は何のマスでしょうか？

「詐欺に合い、1000万の借金を負う。いきなりついてない……」

佐助君、いきなり借金みたいです。

ていうか、まだ一巡目なのにいきなり借金って……

「次は僕だね……」

今度はエリオ君。

エリオ君は一体どのマスに止まるのでしょうか？

「僕は……5だ！」

エリオ君は自分の駒を5マス進めます。

「えっと……株で大儲け、3000万円ゲット。やった、ついでる!!!」

これでエリオ君の所持金は3500万円。

エリオ君が1位です。

「それじゃあ、俺はカードを使うな。俺の使うカードは罾、便乗。他のプレイヤーの止まったマスの効果を自分にも与える事が出来る。それによって俺の所持金も3500万だ」

エローシュ君がさっき手に入れたカードを見せて説明してくれました。

「罾ってそうなの!？」

ルーちゃんが慌ててエローシュ君に質問します。

「いや、これ以外にも相手を陥れたり、自分に使われた罾を他の人にする事が出来るカードもある」

「っていつか余裕ねエローシュ。流石前回1位って所かしら？」

「説明だよ。俺達はともかくキャラ口ちゃん達は全く知らないんだから」

その後ですが、ルーちゃんはカードマスでカードを。真白ちゃんは私と同じで所持金が半分になりました。

そして人生ゲームは進みます……………

5ターン目……………

「それじゃあ俺の番だな」

ゲームは進んで5回目まで来ました。

皆の所持金を見てみましょう……………

エローシユ君……………2500万円、カード2枚
私……………150万円、カード1枚
夏穂ちゃん……………500万円、カード1枚
佐助君……………2000万、カード3枚
エリオ君……………1200万、カード1枚
ルーちゃん……………100万、カード0枚
真白ちゃん……………600万、カード2枚

こんな感じですよ。

最下位は佐助君。

1位はエローシユ君です。

だけど佐助君のカード3枚はとても気になります。

このゲームも大体掴めてきました。

借金を気にするより、カードを集めて一発逆転を狙うほうが借金を
抜け出せる可能性が高いです。

なにせ普通のマスは殆どマイナスですから……………

今私の持っているカードは一発逆転を狙える1枚となっております。
もう少し粘って使えば……………

でも粘り過ぎも駄目です。

15ターン目になっても借金の方は罰ゲームがあるので、それまでには借金をどうにかしないと……………

罰ゲームが何なのか分かりませんが、嫌な顔をしている4人を見れば、私は絶対にやりたくありません。

いつ仕掛けるかが重用ですね。

「カードマスだ、1枚引くぞ。……………げ!？」

そう言ってエローシュ君はカードを見せました。

「イベントだ……………」

イベントの殆どがマイナスの効果。

一体どんな内容だろう？

「イベント、立場逆転。引いたプレイヤーの所持している所持金と最下位の所持金を交換する。なお、借金は移動しない……………って俺大損じゃん!！」

「助かる、エローシュ」

これでエローシュ君の所持金は0円に、佐助君の所持金が500万になりました。

「そして僕はこのタイミングで2枚のカードを使う。1枚は10倍
手に入れたお金を10倍にする。これで僕の所持金は5000万」

「……………5000万!?」「……………」

借金が無くなった上に一気に1位に躍り出ました。

「そしてもう一枚はアップダウン。僕が上昇した分を他のプレイヤー
にマイナス出来る。僕が指名するのはルーちゃんだ……………」

「わ、私!?」

ということは 2000万から5000万だから…………… 7000
万!?

ルーちゃんの所持金は100万ですから 6900万ですね。

「一気に借金が……………」

「悪いけど、カードを持つてる奴を選ぶとっぺ返しを受けそうだ
から」

「……………」

恐ろしいコンボです。

ですが、佐助君のカードは残り一枚になりました。

これで脅威が多少薄くなったと思います。

「今度は僕だね。……………4だ」

うえっ！？私ですか！？

「さあ、キャロは1枚だからそれね。キャロもこの二枚から選んで」
うつつ、せつかく良いカードだったのに…………

私が引いたのはさっきエリオ君が使っていた緊急回避です。

「キャロのカードは…………うそ！？私は早速このカードを使うわ。天国地獄。全てのプレイヤーは所持金と借金の金額を交換する」

「うそおおおおお！？」
「いやったー！！」「」

ああ、もつと後で使おうと思っていたのに…………

「俺は関係無いな」

エローシユ君は0円ですからね。

結果的に…………

エローシユ君…………0円、カード2枚
私…………150万、カード1枚
夏穂ちゃん…………500万、カード1枚
佐助君…………5000万、カード1枚
エリオ君…………1200万、カード1枚
ルーちゃん…………6900万、カード1枚
真白ちゃん…………600万、カード2枚

このような感じですよ。

「次は私ですね。回します」

真白ちゃんがルーレットを回しています。

「5です。……………あっ、プラス1000万だ。しかもカードも1枚引ける」

真白ちゃんは地味にプラスマスを何度も引いてるような気がします……………

15ターン目……………

人生ゲームは進み、15ターン目となりました。

所持金は相変わらず変動が余り無いですが、皆カードを貯めていきます。

このターンで借金の人は罰ゲームです。

一体何が待っているのか……………

ちなみに今の所持金とカードは……

エローシユ君…… 1700万、カード4枚
私…… 400万、カード4枚
夏穂ちゃん…… 200万、カード3枚
佐助君…… 5300万、カード3枚
エリオ君…… 1000万、カード5枚
ルーちゃん…… 4800万、カード2枚
真白ちゃん…… 2000万、カード6枚

こんな感じですよ。

って真白ちゃん、カード6枚って……

「よし……」

エローシユ君が息を飲み、ルーレットを回しました。

「俺の駒は……カードマスだな。カードは……イベント。」

来ました。

エローシユ君はここで勝負を仕掛けてくると思います。

「イベントの内容は所持金消失、全プレイヤーの所持金を0にする。ただ、借金のプレイヤーは関係無い」

「待った！私は緊急回避でイベントを回避！」

「私も緊急回避を使う」

ルーちゃんと真白ちゃんは緊急回避でイベントを回避しました。

「私は何もしない」

夏穂ちゃんはこれにより所持金が0になりました。

「まあそれなりかな。次はキャロちゃんの番だよ」

エローシュ君はカードを使いませんでした。

後の為にとっておいてるのか、借金を帳消し出来る手段が無いのか

……

エローシュ君の表情からは全然分かりません。

流石エローシュ君ですね……

「回します」

取り敢えず私はルーレットを回します。

出来ればカードマスに止まってイベントを起こしたいのですが……

「私の止まったマスは所持金アップですね。ルーレットで出た数だけ1000万掛けます」

これで一気に借金を帳消し、逆に一気に1位にもなれそうです。

「でた数字は………6です」

よし、これで私も6000万アップ。

「私はカードを使うわ。便乗、これにより私も6000万アップ」

さっき、所持金0になった夏穂ちゃんですが、これで所持金が6000万になりました。

「よし、次は私ね」

夏穂ちゃんがルーレットを回します。

「私の目は5ね。マスはカードよ」

ここで夏穂ちゃんもカードマスです。
一体何のカードを………

「私の引いたカードはイベント、大豊穰よ。借金を持つてる人は0に、借金じゃない人はカードを引けるわ。イベントを引いた場合はイベントは起きず、そのカードをデッキに戻すの」

凄いカードです。

借金を減らすだけでなく、カードまで引かせるとは………

「だけど、私はカードを使うわ。カードは革命!!使ったターン、カードの効果を逆にする。プラスならマイナスに、マイナスならプラスに」

うそっ!?!ここでそのカードですか?

「これで、借金じゃない人は所持金0、借金の人はカードを1枚捨てなさい!」

「俺は完全回避」

「わ、私も完全回避を！」

うつつ、ここで使う羽目になるなんて……………

「そして、私も緊急回避を。これで私にデメリットの効果は無いわ」
今回避けたのはエローシユ君、私、夏穂ちゃん。

他のみんなはカードの効果を受けて所持金0、借金の方はカードを1枚捨てます。

ルーちゃんは所持金が0に、佐助君、エリオ君、カードを1枚捨てます。

「次は僕……………」

佐助君がゆつくりとルーレットを回転させます。
なんだか不気味です……………

「出た目は3……………」

止まったマスは……………

「カード交換……………任意のプレイヤーとカードを交換する……………僕は真白ちゃんのカードと交換する……………自分は出すカードを選択でき、相手は選択出来ない」

佐助君はみんなに説明して、真白ちゃんとカードを交換しました。

「次はエリオ……………」

「うん、回すよ……………僕は4が出たから4マス進めるね」

そう言っつて自分のコマを進めます。

「止まったマスはカードだね、カードは……………イベントじゃない。次はルーだね」

「……………私のターン」

慎重にルーレットを回すルーちゃん。

借金さえしなければルーちゃんも罰ゲームを免れることが出来ます。しかし、ルーちゃんは後カード1枚しかありません。イベント回避出来るカードで無いと罰ゲームに……………

「出た目は8……………」

ゆっくりと自分のコマを進めます。

「止まったマスはマイナス……………くっ、カード仕切り直し。これで前のマスに戻り、もう一度ルーレットを回す」

ルーちゃんはどうとう最後までカードを使っつてしまいました。

「出た目は……………5」

出来ればカードで一発逆転を狙わないと不味いです。

「お願い……………！」

ルーちゃんも一生懸命祈りながらゆっくりとコマを進めます。

「私の止まったマスは……………カード、お願い!!」

そして引いたカードを見て、ニヤリとしました。一体何を引いたのでしょうか？

「最後は私ね」

そう言って真白ちゃんはルーレットを回す前に1枚のカード出しました。

「私は反射鏡を使います。これにより、このターンの自分に対してのイベント、カードの効果が無効にします。」

仕掛けてくる？

「更に税収を使います。これによりカードを使うのに500万払わなくては使用できません。」

「それは勘弁！カード、ライトニング！これでそのカードを破壊する！」

エローシュ君がすかさずカードを破壊します。エローシュ君は借金なので当然ですね。

「ここで僕は祝福を使つよ。カードが使われる度に500万を得ることが出来る」

「エリオ君、面倒なカードを今になって………だけど、一気に畳み掛けます！私はカード制限。これによりこのターンに使えるカードは1枚になる」

「僕がライトニングで破壊」

「またエリオ君ですか………」

「そして祝福の効果により僕の所持金は0になった」

これでターンが終了すればエリオ君は罰ゲーム無しです。

「更に最終戦争発動！カードを持っている人はカードの枚数×1000万を捨てなければならない」

こ、ここですか！？

「俺は後1枚だから、借金は2700万に………」

「私は2枚なので所持金が3600万に………」

「僕は緊急回避………」

「僕は効果反転のカードを使う。これで枚数×1000万アップ」

「私は1枚だから借金1000万ね」

これにより、

エローシュ君………12700万、カード1枚。

私………3600万、カード2枚。

夏穂ちゃん……………6000万、カード無し。
佐助君……………15300万、カード2枚。
エリオ君……………3500万、カード3枚。
ルーちゃん……………11000万、カード1枚。
真白ちゃん……………0円、カード3枚。

まだ真白ちゃんはカードを3枚持っています。
次は何をするのかな……………？

「次行きます！イベント再発、ルーレットを回さない代わりに、過去に行なったイベントを発動します。私が発動するのは大豊穰。続けて革命、そして最後に大窃盗。全員から500万ずつ奪うことが出来ます」

「僕はスルーを使って革命を回避、これで借金帳消し……………」

「僕は身代わりを発動。大豊穰を誰かに移せる。これを佐助に」

「元々0なので僕は問題無し……………」

エリオ君と佐助君は回避。

他の人は所持金が1500万になってしまいました……………

ただどこかで真白ちゃんのカードは0になりました。

畳み掛けるなら今です！！

「私はカード、天使と悪魔を使用します。ルーレットを回して、奇数なら借金帳消し、偶数なら強制罰ゲームです」

これで……

「ルーレットを回します!」

私は勢い良くルーレットを回しました。

「止まったのは………3!これにより、借金を0にします!」

「僕もカード便乗を発動。これでぼくも借金0に………」

これで私も罰ゲームが無くなりました。

そしてその後、誰もカードを使いません。

夏穂ちゃんは絶望した顔になっています。

「誰も使わないみたいだから俺が最後のカードを使うな。俺のカードは大逆転の奇跡。このカードは最後のターンの一番最後に使用できる。このカードはカードの効果で捨てたり破壊されたりしない。自分の借金を所持金のあるプレイヤーに肩代わりしてもらえる。これで俺は真白ちゃんに肩代わりをお願いするかな」

「そ、そんな………確かそのカードって………」

「カードの中で唯一一枚だけしかないカードだよ。エリオじゃ罰ゲームにならないからね。残念真白ちゃん」

「うっっ………」

これで罰ゲーム決定は夏穂ちゃんとルーちゃん、真白ちゃんに決定です。

「これでゲーム終了。1位はエリオ、罰ゲームは夏穂とルーちゃん、真白ちゃんに決定!!」

ふう、何とか罰ゲームは避けられました……

「うつつ、せっかく良いカードだったのに……」

ルーちゃんの持っていたカードは肩代わり。これは自分に対しての効果を相手に与える事が出来るのですが、真白ちゃんの使った大窃盗は全員のプレイヤーが対象だったので使えなかったみたいです。

「さて、罰ゲームの3人、罰ゲームのカードを引け。その引いた内容を明日の学校が終わるまでしてもらうからな」

これはルールにあったので仕方ないですね……

「わ、私から引くわ……」

恐る恐るカードを引く夏穂ちゃん。

はたしてどんなカードが……

「明日一日猫耳カチューシャを付けて、言葉の最後に猫の鳴き声を付けて一日過ごす……って何よこれ〜!?!」

「カチューシャ」

「あっ、佐助ありがと……って違う!?!」

渡されたカチューシャを地面に叩きつけました。

「諦める、罰ゲームは絶対だ。従わないとみんなの命令を聞かなくちゃいけないぞ?」

「うっ……………」

暫く静かになり、覚悟を決めたような顔になりました……………

「真白ちゃんは何でした?」

「わ、わ、私は……………」

そう言って私に見せてくれたカードには、

『髪型をアフロで過ごそう』

「……………えっと……………ガンバ」

「うっ……………」

真白ちゃんが可哀想です。

「私は……………1位の人のメイドになれ!?!」

「1位って僕だから……………ええっ!?!」

「ええっ、やだよ!恥ずかしいよ!?!」

「僕も結構恥ずかしいような……………」

「それは私が嫌って事……………」

「何でそうなるの!?!」

ルーちゃん、まんざらでも無いんじゃないですか？

「まあ前よりはマシな罰ゲームだな。みんな、それぞれ罰ゲームし
つかりやれよ。」

「…………もう絶対にやらない!?!」

次の日、猫耳カチューシャを付けた夏穂ちゃん、アフロのかつらを
被った真白ちゃん、メイド服を着たルーちゃんが学校にいました。
3人ともかなり目立っていて、見物客が多くやってきました。

その事を詳しく話したいのですが、3人に固く口止めされたので、
いつかの機会に…………

第11話 ボードゲームの筈ですけど何かが違う……（後書き）

普通のボードゲームで一味違う感じにするはずが、ボードゲームではなく、カードゲームに……

しかもやたら細かくて読みづらかったかもしねませんね……

申し訳無いです。

次は……どうしようか。

そろそろエローシュ達の家遊びに行く話でもしようかな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6362y/>

有栖キャロの小学校物語

2012年1月6日10時46分発行